

残像

くろもちひろゆき

あらすじ 「残像」 くらもちひろゆき

とある地方都市の坂下写真館。未曾有の大震災から十年ほど経った頃だろうか。被災県ではあるものの、被災地からは遠く離れた内陸にある。この店は、現在の店主、坂下良成で二代目である。

フィルムからデジタルの流れに乗り遅れ、経営は苦しい。

数年前に心機一転「S M A X (エスマックス)」という店名に変更したが、今度は何の店かわからなくなり、さらに客足は減った。

店主、坂下は、特に病気でもないのに、いざというときのために家族宛のビデオレターを毎年撮り、それを出入りの保険外交員小山楓に預けている。妻凜子は、時折店を手伝いながら経理を担当。長女莉菜は、現在高校二年生で、幼い頃から店に出入りし、従業員山崎にほのかな恋心を寄せていた。

店にはフィルムの現像機が未だにあるため、フィルムカメラの愛好家が、少ないながらも常連として通っていて、その中に、風景写真専門の十文字がいる。彼は、なぜか人物の写真は撮らない。

ある日、がんで余命宣告された税理士、岩渕が妻凜を伴い、遺影を撮影に訪れる。実はこの岩渕、凜子と中学高校の同級生で、そんな縁もあり、危うい店の経営相談に乗っているのだ。

元気な夫の姿を残しておきたい凜は、岩渕を半ば無理矢理連れてきたのだが、岩渕は、結婚式を挙げていないので記念写真も撮ろうと提案する。二人は再婚だったのだ。

店の苦境を良く知る凜子は、山崎にそれとなく独立を勧めたり、莉菜に、お金のかからない進路を誘導したりしている。

一年後、フィルムカメラの現像機をついに手放すことにした店では、それをもらい受ける十文字が、手伝いをしている。坂下がうつ病になり、人手が足りなくなっていたのだ。そんな中、山崎が入籍することを凜子に告白する。どうやらできちゃったようだ。

そこへ、再び遺影を撮影に岩渕が訪れる。去年撮ったあと、体調が回復し、一年生き延び、縁起を担いでやって来たのだ。一縷の望みをかけて訪れた凜を十文字が慰める。十文字は震災時に沿岸にいて家族を亡くしていた。写真だけは手許に戻って来たのだという。

深夜、坂下は一人ビデオレターを撮影している。そこに、高三になった莉菜がやって来て、卒業したら店で働きたいと言い出す。

さらに一年後、。すっかりアルバイト風情になった十文字が、店内に飾られた岩渕の遺影を見ている。そこへ、保険の外交員となった凜が小山に連れられてやってくる。山崎相手に勧誘の練習をしているようだ。カメラマン見習いとなった莉菜に、今度は十文字が遺影の撮影を願っている。

深夜、坂下は相変わらず家族宛のビデオレターを撮影していた。

登場人物

坂下 良成 (50)坂下写真館店主

坂下 凜子 (52)良成の子。経理担当。

坂下 莉菜 (16)長女。高校2年生。

山崎 隼太 (35)従業員。

沢口 椿 (32)山崎の婚約者。

岩渕 寛志 (52)税理士。

岩渕 棗 (37)その妻。

小山 楓 (36)保険外交員。

十文字 悦郎 (64)フィルムカメラ愛好家。

とある地方都市の写真館。この店は、現在の店主、坂下良成で二代目である。古くからある街道筋から、路地を入ったところにあるこの写真館は、この街で一番古いというほどではないものの、二代目になっている程度には老舗である。しかし、フィルムカメラからデジタルカメラへの移行の時期に、少々後れを取ったため、未だそれを引きずっており、経営は苦しい。それなりの借金とそれなりの財産を持ち、それなりの腕でそれなりの稼ぎを得ている。主に学校の卒業アルバムなどで大きな収入を得ているが、少子化の影響で、小規模の学校が閉鎖、または合併という事態に晒されているため、明らかな先細りである。そんな坂下写真館。数年前に心機一転「SMAX(エスマックス)」という店名に変更したが、今度は何の店かわからなくなり、さらに客足は減った。

開演前

夏、夕暮れ。遠くにヒグラシの鳴き声が聞こえている。舞台奥中央やや上手には、古くさいソファがあり、その前にちよつとしたテーブルがある。傍らには本棚のようなものもあって、その近くには、掃除道具やぬいぐるみ、子どものオモチャ、その他、どんな用途かわからない奇妙な置物や道具なども微妙に雑に置かれている。ソファの後ろには簡単なキッチンにつながる廊下。上手は撮影スタジオに通じており、数種類の椅子が置いてある。さらに奥に入ると母屋に通じる廊下らしく、時折、家族が顔を出す。下手はお店。カウンターがあり、奥の仕切りの向こうはちよつとした事務室になっている。舞台前方のテーブルには二台ほどパソコンがあり、プリントする画像を選べるようになっている。

良成が、上手からビデオを取り付けた三脚を持ってくる。それを適当に置き、下手へ去る。しばらくして戻ってくると、舞台上手奥のやや古くさい印象の椅子に向けてビデオをセッティングする。電話が鳴る。

良成 お？ 珍しいな。

そそくさと下手カウンターから奥へ去って行く良成。電話を取る。ときどき、良成の体が見え隠れする。

良成(声) 毎度ありがとうございます、S M A Xでございます。……ああ、はいはい、やってますよ。あ、いや、今日はもう閉店ですけど、フィルムも、はい、大丈夫です。いやいや、店でやってるんで、速いですよ。30分くらい。でもまあ、ちょっとね、一日二日待ってもらえば、フォトブックとか出来ますけどね。まあ、はい……はいはい、はい……お待ちしております。

電話を切り、奥から出てくると、ビデオを椅子に向けてセツティングする。

録画スイッチを入れ、椅子に座る。

良成 あー、テス、テス、こんにちは、坂下良成です。

そこまで言うと、ビデオのところに戻ってくる。そして、撮れているかの確認をする。

良成 オツケーだね。

開演

1 夏の夕暮れ①

良成、再び録画スイッチを入れると、椅子に座る。

良成 ええー、みんな、元気か？ お父さんは、ご覧の通り……元気だ……でも……もしかして、みんながこれを見る頃は……。

良成、感極まって嗚咽をもらし始める。

良成 ……ダメだ……。

良成、ダダダッとカメラに走り寄り、録画を停止する。目頭を押さえてしばらくじっとしている良成。気を取り直して。と、電話の音。

良成 なんだよ今日は……。

事務室へ。電話を取る。

良成(声) 毎度ありがとうございます。S M A Xでございます。……
ああ、えーっと、もう閉店で……はい、すみません、ええ、朝は10
時から開いてますんで。はい、はいはい、お待ちしております。

良成、電話を切ると、またビデオのところに向かい、スイッチ
を入れ、椅子に座る。

良成 おはよう、こんにちは、こんばんは。いつ見てもらえるかわから
ないので……みんな、元気なことと思う。まあ、風邪くらいはひいて
るかも知れないけど、まあ、元気でしょう。お父さんは、ご覧の通り、
元気だ。でも……もしかして、みんながこれを見る頃は、お父さんは
この世にはいないかも知れない。だから、今のうちにこうやってメッセ
ージを残しておこうと思う。まずは、お母さん、あ、いや、やつぱりこ
は名前で呼んだ方がいいかな？ 凜子……さん……なんか、ものす
ごく久しぶりのような気がする。……月並みだけど、いままであり
がとう。普段から結構お礼は言ってたような気がするんだけど、ま
あなんととってもお礼はしとかなきゃいけないよね。んで、詳しいこ
とはいろいろまた後で。それから、苺菜、おやつばかり食べてちゃ
ダメだぞ。いやいや、んなことを言いたいわけじゃないんだ。……い
ま、悩んでることはあるか？ お父さんは苺菜の悩みの相談受ける
ことはほとんど無かったと思うけど、悩みはしまつとかないで、誰か
に話さないね。話すつてのは、離す、遠くに離すとか、自分から解
き放つという意味があるんだ。もちろん自分で思い悩むことも必要
なんだけど、そうね、ある程度思い悩んだら、誰か信頼できる人に話
しなさい。で、もし、何かの拍子でバレちゃっても、その人を責めちゃ
いけないぞ。バレる話つてのは、バレるべくしてバレるんだ。どうして
もバラしたくない話なら、その時は心の中でお父さんに話してくだ
さい。

良成のセリフの間にゆっくりと暗転。

2 秋の昼下がりに①

暗転の中から声がする。

山崎 いらっしやいませー。

明るくなると、カウンターに山崎がいる。
下手から、ちよつと大きめの荷物を持った岩淵棗が、
おずおずと入ってくる。

山崎 いらっしやいませ。

棗、後ろを振り返りながらカウンターまで来る。

山崎 ようやく涼しくなりましたね。

棗 ええ、なんか、夏長くなっちゃいましたね。

山崎 昔はお盆過ぎたらもう夜なんか寒いくらいでしたよね。

棗 ええ……あの……予約の……。

山崎 ああ……岩淵先生の……。

棗 え、あ、はい……。

山崎 こちらへどうぞ。

山崎、中央のソファーに案内する。

山崎 先生は……。

棗 ああ、外でタバコ吸ってます。

山崎 あれ？ 先生禁煙してましたよね……。

棗 それが……。

棗、急に嗚咽を漏らし始める。

棗 ……もう、古い先短い身だからって……。

山崎 え？ 遺影って、そんな、あれですか？ 切羽詰まった
んですか？

棗 ……もう、余命宣告されてるんです……。

山崎 ……ああ……。

棗 だからまだ、元気なうちにつて、お葬式に来た人たちが元
気な頃の姿を思い出せるようにつて……。

山崎 岩淵先生がねえ……。

棗 いやあたしが……。

山崎 ああ……。

棗 あたしが……あたしが無理に遺影撮りに連れ出したんです
う。 (泣く)

2—②

下手から、寛志と良成の声が聞こえる。
平静を取り戻そうとする棗。

寛志(声) 引き継ぎ先はね、まあ、今探してんだけど、あんまり
信頼できるのっていないんだよねえ。

良成(声) そんな先生、縁起でもない……。

寛志(声) だって、遺影撮りに来てるんだからさあ。

寛志と良成、話しながら入ってくる。

良成 いまはそういうの、何でもなくても遺影撮りに来る人、多
いんですよ。

山崎 いらっしやいませえ。

寛志 ああ、どうも、俺は別に今ある適当なのでいいんじゃない
のって思ってたんだけど、うちのがさあ……。

山崎 ……ああ、あの……奥様……。

寛志 ちゃんと保険金入るんだからめそめそすんなんて言っ
ただけ。

棗 そういう問題じゃないでしょ！ まだ子どもたちだって小学
校入ってないのに……。

寛志 大丈夫だって、まあ慎ましく暮らしていけば十年くらい何
とかなるくらいは貰えんだから。

棗 そんなこと言われたって……。

山崎 やっぱ、愛ですよ、愛。

良成 そうですね、愛ですね。

寛志 愛の表現は惜しみなく与えるだろう。しかし、愛の本体は
惜しみなく奪う。

棗 え？ どういう意味？

寛志 あ、いや、ちょっと思い出しただけ。

棗 ええーっ……。

山崎 ……あ、団子食べますか？ さっきちよつといただいたん
で、写真クラブの生徒さんに……。

良成 ああ、うん、お茶入れて、どうぞどうぞ……。

舞台真ん中のソファに誘う良成。

2—③

山崎、キッチンの方に去る。

良成 衣装、替えます？ ちょっと気合い入った感じに。

寛志 いいよお、着替え持ってきてないし。

良成 いやいや、いくらがあるから、衣装。まあ、スーツとか、ドレスシャツとか、ちよっと変わった衣装とか。

寛志 いいよ普通で。

良成 まあ、サイズがあればいいんですけど……。

寛志 いいよこのままで。

棗 衣装、持ってきてます。

寛志 え？

棗 スーツですけど、この人、普段着っていうか、仕事着はスーツなので。

寛志 いつの間に……。

棗 じゃあ早速着替えましょう。

良成 あ、スタジオの方にちよっとした着替えるところありますんで……。

寛志 ちょ、ちよっと休ませて……。

棗 あ、ああ……。

寛志、ゆっくりとソファに座る。

寛志 はあぁーっ。

良成 やっぱり、疲れやすいですか？

寛志 タバコ吸うとね、ガクツと疲れるんだよね。

棗 だったらやめればいいじゃない！

寛志 そうだよね、禁煙すればいいんだよね。でも、禁煙してもね、今さら遅いんじゃないかと思うんだよ。実際ちよっとは禁

煙したわけで。

棗 今さら遅いとかいわないですよ……。

寛志 んじゃ、手遅れ……。

良成 先生ー。

寛志 冗談冗談。

良成 冗談になってないですよ。

棗 ……あの、ちよっと、スーツかけてきます。

良成 ああ、はいはい、どうぞどうぞ、こっち……。

良成、棗を上手へ連れて行く。

残る寛志。何となく辺りを見回す。ソファアの端まで行くくと、手が届きそうなところに七五三用の刀を見つけてる。にじり寄って、刀に手を伸ばす。微妙に届かないので、ちよっと座り直して手を伸ばすと、刀を取る。刀を傍らに置くと、少し息が荒い。
刀を抜く、サヤをソファアに置き。サヤを見る。

寛志 小次郎、敗れたり。

刀を構えてみる。そして、しばらくじっと刀を見る。くるりと刃先を自分の腹に向け、突き立てる。

寛志 か、介錯を……介錯を……。

そこへ、お茶とお菓子を持った山崎が戻ってくる。

山崎 まだ冷たいのでいいですよねって……あれ？

寛志、何事もなかったかのように刀をサヤに仕舞う。

寛志 これ、七五三のだね？ うちは女の子二人だから、刀には縁がなかったなあ。

山崎 いま、切腹しようとしてませんでした？

寛志 ええ？ なんで？

山崎 いや、なんてって、なんかそういう動きだったんで。

寛志 山崎君は切腹の動きを見たことがあるのかい？

山崎 いや、無いです。

寛志 だってこれはオモチャだよ。

山崎 まあ、そうですけど……あ、これ、どうぞ、団子かと思ったらカステラでしたね。

寛志 団子とカステラどうやったら間違えられるんだ？

山崎 ああ、何ででしょうねえ、団子、食べたかったのかも知れないです
ねえ。

山崎、グラスに入れたお茶とカステラをテーブルの上に置く。

山崎 あれ？ 社長と奥様は？

寛志、持っていた刀でスタジオの方を指す。

山崎 やべつ、準備しなきゃ……。

山崎、慌てて上手へ去る。見送る寛志。

2 | ⑤

寛志、上手に向かい、今度は立ち上がりざま、刀を抜き、構え、ちよつと見得を切る。

そこへ、下手から小山楓登場。

振り返る寛志。楓と目が合う。

そのまま軽く会釈する二人。

楓 あの、えつと、なんかそういうアレですか？ 撮影ですか？

寛志 あ、いや、あの、ちよつと、居合い抜きを……。

楓 ああ……あの、坂下さんは……。

そこへ、上手から良成戻ってくる。

寛志 え？ あ……。

良成 何やってんですか？ 岩渕先生。

楓 (同時に) ああ、坂下さん。

寛志 ああ、えつと、あの、うちも男の子いればね、刀に縁もあつたんだけど、無かつたからねえ。

良成 ああ、七五三ね。

寛志、刀をサヤに納めると、元あつたところに片付ける。

楓 写真のプリント、お願いしようと思って。

良成 ああ、はい。

楓 今日はこっちの、保険の方のお仕事は抜きで……。

良成 ええ、ははは……。

楓 あと、えつと、これ、去年のヤツ……。

楓、バッグの中からDVDのようなディスクを取り出す。

良成 あ、ああ、すみません。はい、お預かりします。

楓 今年の分、できてるんですよね？

良成 はい、あの、後でお持ちします。えつと、写真の方は、スマホですか？

楓 USBかな？

良成 珍しいですね。

楓 息子が送ってきたんですよ。なんだか。

良成 もう慣れましたかね？

楓 まあ、ここで撮影したときはなんか、制服が浮いてましたけどね。良成 おうちが恋しくて泣いてるんじゃないですか？

楓 まあ、中の写真見る限りでは、楽しそうですね。

良成 へえ、自衛隊で、そんな普通に写真撮れるもんなんですかね？

楓 まあ、良くわかんないですけど、駿写ってるのは、ちょっとお婆あちゃんにでも送ろうかなって。

寛志 自衛隊って、大丈夫なの？

楓 え？

寛志 だって、ほら、いま、南シナ海の方行ってるでしょ、ベトナムと中国がやり合ってるところ……。

楓 ああ、ウチの子はまあ入ったばかりだから、そんな、前線に行くなんてことは無いと思いますけど。

寛志 ウチの子って、え？ あの、お宅の息子さんですか？

楓 ええ、まあ……。

寛志 え？ 息子さん、自衛隊？

楓 はい……。

寛志 いやお母さん若い！

楓 いえいえそんな……。

寛志 だってそりゃ若いでしょう。

良成 まあ、若いんですけどね。

楓 やめてくださいよ……。

良成 何年生まれでしたっけ？

楓 だからあ、歳の話はナシにしましょうよ。

寛志 そうそう、若いお母さん、それだけでいいじゃない。

良成 岩渕先生若い子好きだもんねえ。

楓 学校の先生なんですか？

良成 いやいや、税理士の先生。

楓 ああ、税理士。

寛志 節税のご相談ならいつでも岩渕会計事務所に、っていつでももう廃業しちゃうかも知れないけど。

良成 お願いしますよ、うちの経営立て直してからにしてくださいよ。

寛志 それは経営者次第でしょ。立て直すも潰れるも。

良成 攻めていきたいんで、攻めの経営で、カメラ買い換えないとね。

寛志 なんかささやかな攻めだなあ。

良成 ささやかでもね、攻めの姿勢大事でしょ？ 攻めの姿勢がない

と、やっぱりこの業界どうしたってジリ貧なんだから。

楓 あのお……。

良成 ああ、すいません。えっとUSBは……。

楓 はいこれ。

良成 あ、はい、これですね。あ、先生、お茶どうぞ。あの、良かったら
小山さんもお茶飲んでください。

寛志 ああ、ありがとうございます。

楓 (同時に)すみません。

良成、USBを受け取ると、パソコンに差し込む。

良成 USBはここで、んで、えっと、この画面上でプリントしたい画
像を選んでもらうんですが……ああ、結構データ量ありますね。

楓 なんだか、動画とか名簿みたいなものもあつたりして……。

良成 うーん……これ、大丈夫なんですかねえ。

寛志 どれどれ？

寛志、いつの間にかパソコンをのぞき込んでいる。

寛志 怪しいねえ、なんか。

楓 そうなんですか？

寛志 なんか内部資料とかじゃないといいんだけど、自衛隊だからね
え……。

良成 まあ、入隊したばかりで、そんな重要な情報にたどり着ける
とは思わないんだけど……。

寛志 名簿とかはね、売れたりするかも知れないし……。

良成 いやいやそりやまずいでしょ。

楓 なんでこんな余計なモノ入ってんでしょうね。

良成 ちょっとわたし見なかったことにするんで、選んでくださいね、
プリントしますから。

楓 あ、はい……。

寛志 これはその息子さんが、意図的に入れたのか？ それとも何も
気にしないで入れたのか？ それが問題ですよねえ。

良成 先生こっち、カステラもあるから。

寛志 ああ、ありがとう。でもまあ、あんまり食欲無いんだよね。

良成 いいからいいから。

良成、寛志をソファの方へ連れて行く。

楓はパソコンの前で画像を選んでる。

寛志 んじゃまあ、お茶だけでも……。

2—⑦

良成 岩渕先生、保険って、どんなの入ってるんです？

寛志 なんで急に？

良成 あ、いや、あの、何でかなあ……。

寛志 ……ガン保険は入ってないよ。

良成 え？ いいんですか？

楓 ガン保険は、ガンの治療費を出してくれる保険で、まあ、保険外の治療だと、保険外っていうくらいだから、健康保険とか利かないわけです。そうなるとうちでも高額になっちゃいますよね？

寛志 詳しいね。

良成 うちでお世話になってる保険屋さんなんです。

寛志 あ、そう。んじゃ、ライバルだね。

楓 え？ そうなんですか？

寛志 うちも一応保険の代理店やってるんでね。

楓 それは釈迦に説法でしたね。

寛志 いやいや、中身あんまりタッチしてないから。とにかく掛け金ほどほどで、死亡保障の厚いやツってお願いしてたんで。

楓 ああ……。

寛志 ああ、だから保険の話出たのね？

良成 え？

寛志 保険屋さんいたから。

良成 ああ、そうですよねえ、そうですよ。

寛志 慎重しく暮らして十年分くらいあればさ、その間に仕事でもちよこちよこやってれば、地元の大学くらいまでなら何とかなるでしょ、きつと。保険の外交とか、やっぱり大変ですかね？（楓に）

パソコンに向かって画像を選んでいる楓に向かって話しかける。

寛志 聞こえてないか……。

良成 なんか聞きたいんですか？

寛志 いや、やっぱり未亡人になっちゃうわけだから、仕事しないってわけにもいかないでしょ？

良成 大丈夫大丈夫、女やもめには花咲くでしょ、男やもめにはウジがわくけど。

寛志 花、咲いちやうかあ。

良成 でも、まあ、今はそういう気分じゃないでしょ。

寛志 歳の離れた男と結婚なんかするときは、未亡人になった後のこと、こつそり計算してるんじゃないの？

良成 そんなことないですよ。やっぱりお金の問題じゃないんですよ。奥さん若いし、不安なんですよ。

寛志 なんか、言ってた？

良成 いや、特に何かあってあれでもないですけど、あの沈み方は演技じゃないですよ。

寛志 わかりませんよお、女の人は……。

良成 まあ、そうですね……。

寛志 あの、さあ、今日、遺影だけじゃなくてさ、二人並んでる写真もお願いできる？

良成 ええ、いいですよ、もちろん。

寛志 ほら、俺二度目だったからさ、やってないのよ、式。

良成 ああ……。

寛志 写真だけ撮るか、なんて話しもあったんだけど、結局うやむやのままここまで来ちゃってさ。

良成 七五三のときは、基本娘さんメインですからね。まあ、家族写真は撮りますけど、夫婦のは、撮らないですよね。

寛志 だからさ。

良成 んじゃ、花嫁衣裳とかウエディングドレスとか、そういうのいいんですか？

寛志 いい、いい。

良成 いやいや、先生良くても奥さん良くないでしょ。

寛志 もともとそんなことするつもりじゃないんだもん。たまたまだからさ。

良成 ありますよ、一応、ある程度サイズフレキシブルなヤツが。

寛志 だからそう大袈裟なあれじゃなくていいのよ。
良成 そうですか？

2—⑧

上手から、棗戻ってくる。

楓 わたしも、着たことないですよ、ウエディングドレスとか白無垢とか。

寛志 あらもったいない。

楓 やっぱり一度は着てみたいなと思うんですけど……。

寛志 これからこれから。

楓 いやいやいやいや。

良成 いやいやいやいや、小山さんはこれからでしょう。ねえ。
寛志 その通り、俺ももっと寿命があればなあ……。
棗 どういう意味？

寛志、良成、振り返る。

寛志 どういう意味って、ねえ。(良成に)

良成 いやいやわたしに振らないでくださいよ。

棗 さらに若い奥さんもうなの？ 芸能人みたいに。

寛志 だから俺にはそんな寿命がないのよ。

棗 寿命があったらそういうことなのね？

良成 いやいや、いま、あの、今日、二人の写真も撮ろうって話してたんですよ。

棗 そんな、わざわざ写真撮ってもらうような服じゃないですし。

良成 まあ、スナップみたいなの、遺影の他に、ちよつとした二人の写真撮りますね。

棗 いいです。

良成 んじゃもうアレだ、今から、ここから撮っちゃいましょう。

棗 ええ？

寛志 まあ、いいじゃないの、一緒に写真撮るくらい。

棗 だって……。

2 | ⑨

良成、事務室の方に行く。

楓 なんでみんな、わざわざ写真撮りに来るんでしょうね？ 写真館に。

棗 え？

楓 みんな、カメラ持ってるし、まあスマホとかですけど、誰でも写真撮れるじゃないですか。

棗 うーん……やっぱり、腕、ですかねえ。

寛志 腕ねえ。

棗 あと、機材とか？

寛志 機材ねえ。

棗 七五三のヤツとかは、ほら、いろいろやってくれるじゃないですか。アルバムっていうか、写真集みたいなのとか。データは、なんかこう、ストーリー仕立てみたいにしたりして。

寛志 まあアレは面白いけど、ほら、遺影なんかはさ、普通はある写真で何とかするじゃない。なんでここで撮ることにしたの？

棗 え？

寛志 どうしてもって言うからさ。

楓 あの、遺影撮りにいらしたんですか？

棗 ええ、まあ……。

楓 ……そうなんですか……。

寛志 そんな、俺の遺影なんだからさ、そんなお母さんが暗く沈むことはないわけで……。

楓 いや、なんか、うちの息子が、そうだったらやだなあって……。

寛志 自衛隊の？

楓 ええ。

棗 息子さん自衛隊って、え？ こ、この方の？

寛志 そうなんだって。

棗 ええーっ、お母さん若い！

寛志 若いのよ、お母さん。

楓 だからやめてくださいよ！

2—⑩

良成、カメラを持って戻ってくるなり、パシャパシャと撮り始める。

棗 え？ え、え？

良成 はいはい気にしない気にしない。奥様も、お茶どうぞ。

棗 あ、ええ、はい、ありがとうございます。

良成 どうぞお座りになつて。

棗 あ、はい……。

と、話しながらもシャッターを切り続ける良成。

良成 良かったらカステラも食べてくださいね。

棗 あ、はい……。

良成 ちょっと寄り添ってみたりしましょうか。こう、なんか電車で隣の人に寄りかかって睡っちゃうみたいな……。

棗 こ、こんな感じですか？

良成 いいですねえ。岩淵先生、ちょっとめんどくさそうにお茶に手を伸ばしてみましようか。

寛志 俺？

良成 そうそう、あの、なんというか、つまらなそうな感じで。

上手から、携帯を耳に当てながら、山崎戻ってくる。

山崎 はい、はいはい、えっと、多分大丈夫だと思うんですが、ちょっと折り返させてもらっていいですか？

山崎、携帯を切る。

山崎 あれ？ もう撮ってるんですか？

良成 はい、いい感じいい感じ。んじゃちょっと岩渕先生、手を奥様の肩に回してみますか？

寛志 ええ？

良成 あの、反対側の肩にゴミが付いてる感じで、あの、肩を抱くとかそういうんじゃないですか？

寛志 糸くずとかそういうの？

良成 というよりですね、ホコリを払う感じで……。

寛志 ……こう？

良成 そうですそうです、で、ちょっとそのまま、奥様の肩周りの筋肉確認してみましようか。

寛志 ああ、たくましかったくましい。

棗 いいじゃない！

良成 いいですねえ、その、ちょっと、プンってした感じがまたいいですねえ。

山崎 ちょっと社長、いいですか？

良成 ん？ どしたの？

山崎 あの、ちょっと、外行ってきていいですか？

良成 ん？ なに？

山崎 あの、西館さん、生まれそうなんですって……。

良成 生まれそう？

山崎 言ってたじゃないですか、お腹大きい時に、出産のときもお願いしますって。

良成 ああ、あの、妊婦写真撮った……。

山崎 マタニティフォトとか、マタニティ写真とか言いましようよ。

良成 その、マタニティの西館さんが？

山崎 生まれそうなんですって。

楓 あの、それって、生まれるところの写真を撮って欲しいってことですか？

山崎 え？ あ、いや、生まれるところっていうか、生まれるところじゃないでしょう！

良成 まあ、そりゃあねえ。

楓 そ、そうですよね。

山崎 出産後だと思いますけど……。

楓 ああ……でも、産後、すぐですか？

山崎 だと思っんですけど……。

楓 よその人に？

山崎 ええ、あの、その人は、妊娠中から何回か撮影に来てて、んで、できれば、出産のときの写真も撮って欲しいって……。

楓 うーん……。

棗 ちよつと、わかんないですねえ。

楓 ですよね……。

山崎 小笠原産婦人科なんですけど、あの、スタジオの方セッティングは、済んでいます。

良成 ああ、一応、カミさん呼んどいて。

山崎 あ、はい、んじゃ、大丈夫ですね？ 行っても。

良成 あの、生まれそうってことはさ、まだ生まれてないんだよね？

山崎 ええ、まあ、多分。

良成 ここから時間かかることもあるんだな？

山崎 いや、わかんないですけど……。

良成 アレだ、現場から直帰でもいいよ。

山崎 ああ、はい、あの、あんまり遅かったらそうします。

良成 んじゃ行ってらっしゃい。

山崎 行ってきます。

良成 カミさん呼んどいてね。

山崎 はい。

山崎、携帯を取り出し、かける。

2—⑪

山崎、携帯を耳に当てながら事務室の方へ。

良成 んじゃ、岩渕先生、そろそろスタジオの方、行きますか。

寛志 ああ、はいはい。

寛志、棗の肩から手を外す。

良成 ああつ！ ちよつと岩渕先生、シャッターチャンス逃しちゃったなあ。

寛志 ええ？

良成 ずつと、奥様の肩抱いてたじゃないですか。

寛志 ああ、まあ、なんかねえ。

楓 あの、坂下さん。

良成 ああ、はいはい、あの、先生、着替え、してて下さい。
棗 あ、はい……。

寛志、棗、上手へ去る。

楓 すみません、お忙しいところ。

良成 いえいえ、選び終わりました？

楓 あ、はい……。

良成 んじゃですね……。

良成、楓の背後に回り込み、マウスを動かす。

良成 こちらの、終了をクリックしていただいて、そうすると、サムネイルで一覧出てきますので、それでオッケーだったら……。

楓 オッケーです。

良成 次へをクリックすると、必要事項打ち込むフォームが出てきますので、ここに住所とか電話番号とか名前とか……。

楓 あ、はい……で……。

良成 終了をクリックすると、確認画面になりますので、そこで確認すると完了です。

楓 あ、はい……。

良成 すぐプリントもできますけど、一日二日待ってもらえれば、フォトブックなんかにしますのです。

楓 そんな急ぎじゃないんで。

良成 んじゃ、いい感じに仕上げときますね。

楓 あの、マタニティとか、多いんですか？ 最近は？

良成 多いですよ。あとは、子どもの写真ですかね。うちはほら、なんというか大手さんみたいな機動力とか、衣裳大量に揃えてるとかそういうのはないんで、まあ、どうしても地味な仕事になっちゃいますよねえ。

楓 遺影も？

良成 え？ ああ、最近は、わりと普通ですね。遺影を事前につけていうのは。

楓 あれ？ ローマ字しか出てこない……。

良成 ああ、これは……。ここ触っちゃったかな……。

良成、キーボードをいじる。

楓 どつか変なところ触っちゃいましたかね？

良成 ちよっとね、うっかり触っちゃうんですよ……はい、直りました。

楓 すいません……。

良成 んじゃついでに打ち込んだんじゃいまいしょうか？ 必要事項。

楓 あ、はい、お願いします。

良成 えっと……。

楓 郵便番号020-0004……盛岡市……。

良成 山岸ですな……。

楓 あ、はい……5丁目12-9……。

良成 5丁目12-9……。

楓 コーポ藤沢、201号。

良成 コーポ藤沢、201号と……電話番号もいいですか？ 019。

楓 662-9005です。

良成 662-9005……はい、終了と……じゃああの、一日二日です……。

楓 あ、はい。

2 | ⑫

山崎、事務室から大きな荷物を持って戻ってくる。

山崎 あの、そういうことで行ってきます。直帰かも知れませんがそのときはよろしくお願いします。

良成 ああ、行ってらっしゃい。

山崎 それじゃあ、ごゆっくり(楓に)……。

楓 ああ、はい……。

山崎、下手へ去る。

見送る二人。

楓 出産直後によその人に、写真撮って貰うって、結構勇気いると思うんですけどねえ……。

良成 そこに疑問差し挟んじやうと、うちも商売なんでねえ……。

楓 あ、いや、すいません。

良成 いやいや、個人的にはね、ちよつとねえ、産後の疲れ切ったカミさんをカメラマンが撮るってのはどうかと思いますけどね。まあ、実際は赤ちゃん中心でしょうけど。

楓 まあ、そうでしょうけど。

良成 かなり身内に近い人じゃないと、産後すぐはねえ、アレなんじゃないかと思えますけど。

楓 全体的に祝福されてるんでしょね。じゃなきゃそんなこと出来ませんよ。

良成 最近子ども少ないですから。

楓 ……あたしは祝福されませんでした……。

良成 でも、もう立派に育て上げたんですから。

楓 ……なんか、気が抜けちゃって……。

良成 うちはまだ、気が抜けませんよ。

楓 あの、今日は仕事の話する予定じゃなかったんですけど、保険、請求とかしなくてよろしいんですか？

良成 え？ な、なんで？

楓 あ、いや、前から聞こうとは思ってたですけど……ビデオレター、ですよ？ 毎年お預かりしてるヤツ。

良成 え？ ああ、もしかして、見ました？

楓 いえいえいえいえ、見てないですけど、でも、もしもの時があったら家族に渡してくれて言われたら、まあ、隠し財産のこととか、他に隠し子がいるとか、色々隠してたことについて……。

良成 いやいや、隠し事じゃないですよ、隠し事じゃ。

楓 あ、すいません、こないだちよつと、その、受取人を奥さんに隠して別の人に、なんていう相談があったもんですから。

良成 いやいや、そういうんじゃないよ、まあ、家族あてのごく普通のメッセージですよ。

楓 もしかしたら、なんか、ご病氣抱えてらっしゃるのかと……。

良成 違います違います、そういうんじゃないんですよ、なんとなくっていうか、まあ、事前に撮っとく遺影みたいなモンですよ。

楓 はあ……。

良成 なんていうか、いつ何があるか分からないじゃないですか、震災みたいなこともあるし、まあ、そういうんじゃないよ、いつ何があるかも分からないですよし。

楓 そうですね……。

良成 あ、ちよつと待ってて下さいね。今年のヤツ、持ってきますから。

楓 あ、はい……。

良成、事務室の方に引っ込む。

2 | ⑬

楓 ビデオレターか……。

楓、パソコンに向かい、USBを開く。

楓 ああ、これは……ビデオレター、じゃないよね。いやいやそんな縁起でもない……。

と、上手から凜子やってくる。

凜子 あ、いらっしやいませ。

楓 あ、どうも。

凜子 あら小山さん、今日は、お仕事？ それともプリントですか？

楓 ええ、プリントです。

凜子 ごめんなさいね小山さん、小山さんうちにとつてはお客様なんだけど、うちも小山さんにとってはお客様なのよね。

楓 どこでも大体警戒されますよね。だって保険の見直しとかってほぼ保険会社の都合ですから。

凜子 いいんですか？ そんなこと言っちゃって。

楓 いいんです、あたし不良保険外交員なんです。

凜子 不良保険外交員……。

楓 だから今日はもう、こっちの仕事は抜きって事になってるんですけど。

凜子 けど？

楓 ご主人、体調崩されたりしてませんか？

凜子 いや、至って健康だと思いますけど、健康診断の結果も、まあ、コレステロールとかちよつとアレですけど、特に危ないようなものはなかつたんじゃないかな。

楓 そうですか……。

凜子 なんかありました？

楓 いやあの、もし、入院とか、検査とかそういうことあったら連絡いただければ、カバーされてる保証もあると思いますので。

凜子 いまのところ、そういうアレはないんじゃないですかねえ。

楓 こう、保険金の支払いとか、入院給付金とか、そういうときは歓迎されるんですよ。当たり前ですけど。

凜子 まあ、どうしてもそうなっちゃいますよね。

2 | ⑭

上手から、棗戻ってくる。

棗 あの、どうすればいいですか？

凜子 あ、ああ、ちよつと待って下さいね。あの、うちの人は……？

楓 そっち、そっちの奥に行きましたけど……。

凜子 はいはい、こんなねえ、お客様ほっぴらかしてねえ。

楓 いえいえ、大丈夫です。

凜子 すみません……。

凜子、事務室の方へ。
残る棗と楓。

楓・棗 ……………あの……あ、どうぞどうぞ……。

棗 ……お父さんも、若いんですか？

楓 へ？

棗 あの、お若いですよね、その、大きい息子さんがいるにしては……。

楓 ああ、お父さん……若いですよ。

棗 やっぱり！

楓 うちにはいませんけど。

棗 ……あ、すみません。

楓 いやいや、お気になさらずに、シングルマザー歴も長いんで。あた

し、ヤンママなんです。

棗 え！

楓 あ、いや、ヤンキーじゃないですよ。大分マイルドな方で。若気の至

りつてヤツですね。

棗 はあ……。

楓 高校の頃産んでるんです。

棗 あ、いや、あ、はい……。

楓 あの、遺影って、最近流行ってるんですか？

棗 え？ いや、流行ってるかどうかは分かりませんが、撮りに来て

みました。

楓 ……あたしも、夫婦で写真撮ってみたかったな……。

二人、何となく牽制し合いながら目を合わせる。

2—⑮

事務室から良成と凜子出てくる。

良成 だからちよっと小山さんに渡すものがあって……。

凜子 それはいいけどお客さんほっほっといちゃダメでしょうよ。

良成 それはそうだけど、あの、小山さん、ちよっと今見つからないんで、あの、フォトブック取りに来るときで……。

楓 あ、はい、大丈夫ですよ。

良成 すみません、待たせるだけ待たせちゃって。

凜子 岩渕君も待たせてるんでしょ？

良成 岩渕先生。

凜子 あたしは岩渕君でいいの、同級生なんだから。

棗 そうなんですか？

凜子 そうなんです。上小路中と西高の同級生なんです。

棗 ああ、上小路中、あたしたちの頃は、悪くて有名でした。

凜子 あたしたちの頃は、まあ、それなりに普通？　ときどきガラスは割れてたけど。

楓 それじゃ、あたしはこれで……。

良成 あ、ありがとうございます。

凜子 ありがとうございます。

良成 すみませんお待たせしてしまって。

棗 いいえ。

良成 岩渕先生は……。

棗 あ、もう着替えて準備万端整ってます。

良成 んじゃ、参りましょうか。

棗 あの、やっぱりあたしも、二人の写真もお願いします。

良成 かしこまりました。

凜子 店番？

良成 もだけど、こっち、手伝って。

凜子 はい、あ、これ(お茶とカステラ)、持ってく？

良成 ああ、うん、そうだね。

凜子、お茶とカステラのお盆を持つ。

三人、上手へ。

凜子 岩渕くんがどういう顔して写るのか楽しみだね。

棗 ふざけた顔しかしないんじゃないかなあ。

凜子 まあそういう人だよな。

三人去る。

3 秋の黄昏①

誰もいなくなったカウンターに次第に夕日が差し込んでくる。

そしてその夕日も次第に薄れてゆき、夜の明かりが点く。

上手から、良成が三脚に付けたビデオを持って登場。

良成 しっかしどこへしまったかなあ……。

真ん中あたりに適当に置き、下手へ去る。

間。

電話が鳴る。数回鳴ったところで、慌てて戻る良成。

電話切れる。

良成 なんだよ……。

良成、上手にあるやや古ぼけた椅子を真ん中あたりに持って来てセッティングする。そして、もう一度下手へ。
間。

また電話が鳴る。

良成素早く戻って来て、事務室までたどり着くが切れる。

良成 うーん、タッチの差だな。

良成、ビデオのところまで来て、椅子に向けてスイッチを入れ、椅子に座る。

良成 あーテス、テス、こんばんわ、坂下良成です。テイクツーです。どこになくしてしまったのか、皆目わかりません。誰にも見つからないように、なおかつ自分だけは見つけられるようにしまっておいたので、なんだか行方不明です。今日は岩渕先生の遺影を撮りました。奥さんとのツーショットも撮りました。ちよつと怖い姉さん女房を持つわたしは、若い奥さんがうらやましいです。

良成、ビデオに戻って来て、チェックする。

良成 オツケーだね。

良成、再びスイッチを入れ、椅子へ。

良成 ええー、みんな、元気か？ お父さんは、ご覧の通り……元気だ……でも……もしかして、みんながこれを見る頃は……。

良成、感極まって嗚咽をもらし始める。

良成 ……ダメだ……。

良成、ダダダッとカメラに走り寄り、録画を停止する。
目頭を押さえてしばらくじっとしている良成。
気を取り直して。と、電話の音。

良成 油断した！

良成、事務室に駆け込む。

良成(声) 毎度ありがとうございます。S M A Xでございます。……
 ああ、えーっと、もう閉店で……え？ ああ、十文字さん？ なん
 だ……。

良成、カウンターのの方に身を乗り出し、写真プリントの袋を
 確認する。

良成 ああ、できてますできてます。……一応、看板消えてるけどカギ
 は開いてるんで……あとのくらいで来ます？ ……ああ、わりと
 すぐ……はいはい、今度は人物撮りましょうよ、人物。(事務室に戻
 る)影のある人物……いやいや、人物を風景として切り取って……。

すれ違いで、下手より十文字携帯で話しながら登場。

十文字 なんかね、自然を撮ってるとき、人物入ると何か、邪魔に見
 えるんですよ。いやいや、別にこっちに向かってピースしてなくて
 もね。

良成(声) 今回ののはコントラストはつきりしてますね。空と山の青ね、
 あと緑ね。それとまあ、光と影？

十文字 なかなかいいでしょ。

良成(声) んじゃまあ後ほど……。

十文字 はいはい、んじゃどうも……。

十文字、携帯を切り、しまう。

と、奥から良成登場。十文字に驚く。

十文字 どうも！

良成 ああびつくりしたあ。

十文字 ごめんね遅くに、店の前にいたの。

良成 言ってくださいよ、ワープしてきたかと思っちゃいましたよ。

十文字 店の名前さあ、前に戻した方がいいんじゃないの？ 坂下写
 真館。

良成 カミさんにも言われるんですよ。名前変えてから売り上げ
 落ちてるって……。

十文字 僕なんかはほら、前から知ってるからわかるけど、この昭和っ

ぼい店構えでS M A Xって言われてもなんだか良くわかんないですよ。

良成 写真とか前に飾ってるでしょ。わからないことはないんじゃないですかねえ。

十文字 何でS M A Xなの？

良成 いやまあ……坂下……写真でS……。

十文字 M A Xは？

良成 ……M A X！

十文字 え？

良成 M A X！！ 最高！

十文字 坂下最高、もしくは写真最高か……。

良成 ダメですかね？

十文字 ダメだねえ……。

良成 ダメですかあ……。

3 | ③

そこへ、良成の娘、莉菜が制服姿で帰ってくる。

莉菜 ただいまあー。

良成 お帰りー。

十文字 お帰りなさい。

莉菜 あ、いらっしやいませ。お父さんなんかおやつある？

良成 なんて店に帰ってくるんだよ。

莉菜 いいじゃん閉店してるんだから。

良成 お客様だっているんだから……。

十文字 いいのいいの、こういうのがね、いいんだよ、アットホーム？

莉菜 山崎さんは？

良成 今日は現場で、直帰。

十文字 おつきくなったねー。

莉菜 あ、はい……。

十文字 僕ここに通い始めた頃は、まだ、幼稚園？ 小学校？ 何年前くらいだっけ？

良成 まあ、大体その頃じゃないですかね。

十文字 十年経ったかな？

良成 ああ、そんななるんですねえ。

十文字 高校生？

莉菜 2年です。

十文字 高校2年かあ……。

莉菜 なんかおやつあるよね？

良成 ん？ わかんないけど……。
莉菜 いつももあるじゃん、こっそり食べる用のおやつ。
良成 すぐ夕飯だぞ。
莉菜 夕飯前の腹ごしらえ。
良成 太るぞ。
莉菜 ああつ、セクハラ！
良成 何言ってるんだよ。

莉菜、キッチンの方へ去って行く。

3 | ④

十文字 仲いいね。

良成 え？

十文字 あのくらいの歳頃の娘さんは、お父さんと口きかないんじゃないの？ 普通。

良成 最近は、そんなでもないみたいですよ。いい歳になってもお父さんと風呂入っちゃう子とかもいるらしいし。

十文字 ええーっ！ そんなことになっちゃってるの？

良成 いやいやウチは違いますよ！

十文字 臭い、とか、キモい、とか、ウザい、とか言われて、カミさんとかにも、ウチにいないですよ！ とか言われてき。

良成 十文字さんち、そんなだったんですか？

十文字 いやいやいやいや……。

良成 え？ じゃ、なんで？

十文字 いやいやいやいや……。

良成 ……あの、どうしますかね？ どれ伸ばしますか？

十文字 ああ……。

良成、十文字の写真のベタ焼きを見せる。

十文字 どれがいいかなと……。

良成 わたしがお勧めするとすれば、これとこれかなあ……。

十文字 あああ、なるほど……。

良成 バランス取ったヤツと、ちょっと極端に色補正かけたヤツを二パターンくらい作ってみると、面白いかも知れないですね。ちょっと不穏な感じのする色調にして。

十文字 何でまた不穏に……。

良成 いやなんか、この後天気悪くなるんじゃないかって気がしたんですよ。

十文字 わかるの？
良成 あ、やっぱり？ だってなんか、そんな感じでしょ。
十文字 プロだねえ。
良成 そりゃまあ一応はねえ。

3 | ⑤

上手から凜子登場。十文字に気づき。

凜子 あ、いらっしやいませー。
十文字 あどうも。

凜子 こないだの八幡平のコンテスト、惜しかったですねえ。
十文字 いやあ、実力実力。

凜子 相当悔しかったんじゃないですか？
十文字 ぜんっぜん。

凜子 次への挑戦ですか？
十文字 まあ、コンテストだけ目的で写真撮ってるわけじゃないから。

凜子 まあ、そうですね。

良成 どしたの？

凜子 あ、いや、あつたあつた。

凜子、ビデオを持って行こうとする。

良成 ちよつ、ちよつと待った！

凜子 あれ？ 使ってた？

良成 いや、まあ、うん、ちよつと使ってた。

凜子 なに撮ってたの？

良成 ええっ？ なるって、あれよあれ、なんだっけ、あの、ど忘れしちゃった、ああ、もう最近固有名詞が出てこないんだよなあ。

凜子 持ってたっていい？

良成 何するの？

凜子 こないだのスポ少の試合、まだ落としてなかったんで。見てないでしょ？

良成 ああ、俺やっとか俺やっとかから。

凜子 ああそう？

良成 ブルーレイにしとく。

凜子 ああ、じゃあよろしく……。

十文字 息子さん？

凧子 ええ。
十文字 なにやってんの？ スポ少。
凧子 野球。
十文字 おお、野球、王道ですねえ。今じゃサッカーやってる子の方が多いんでしょ？
凧子 さあ、どうなんでしょうね。
十文字 ポジションは？
良成 ベンチ。
十文字 ああ、ベンチ……。
良成 出るときは、ライトか？
凧子 まあ、そうねえ。山崎君は？
良成 現場で、直帰。
凧子 山崎君の彼女の話って聞いている？
十文字 おおっ！ 山崎君、ついに？
良成 いやいや、そういう話？
凧子 まあ、そういう話、かなあ。
十文字 山崎君も、長いよねえ。
良成 一通り、仕事回せるようになりましたからねえ。もう最近
は、スタジオの方もあらかた。

3 | ⑥

そこへ、カステラを食べながら、莉菜が戻ってくる

凧子 家庭を持つとなると、職場的にもちよつと考えなきゃねえ。
十文字 おおっ、アットホーム！
凧子 莉菜を見つけてあんた何食べてんの？
莉菜 カステラ。
凧子 また夕ご飯前に、何でいつもお店に帰ってくるのよ。
莉菜 別にいいじゃん。
良成 そんな立って食べてんじゃないの、ぼろぼろぼろこぼすですよ。
莉菜 大丈夫大丈夫、あ。

といってる側からかけらをこぼした模様。

良成 ほらあ……。
凧子 ちゃんと自分で掃除しなさいよ。
莉菜 はあい。

良成 あ、すみません、なんか、お見苦しい家庭を見せて
しまつて……。
十文字 いやあ……。
凜子 せめて座つて食べなさい。

莉菜、無言でソファアに座る。

凜子 すみません、まだまだ子どもで……。
良成 あ、で、どうしましょう？ どれ伸ばします？
十文字 んじゃあね、さっきのお勧めの二枚と、こっちのこれ。
良成 あ、これもいいですね。焼き方は……。
十文字 レアで。
良成 ……レアね……。
十文字 いつも、バランス取つたのと、不穏なのと、逆に振つて
みたヤツ、3パターンでお願いしてもいいかな？
良成 了解しました。大きさは……。
十文字 とりあえず六ツ切りかな。
良成 かしこまりました。んじゃ会計はその時で。
十文字 ごめんね、閉店後に……。
良成 いえいえ、これからもご贖目に……。
十文字 それじゃ。
良成・凜子 ありがとうございますあ。

十文字、下手へ去る。

3—⑦

良成 ありがたいね。
凜子 ホントにね。
良成 アットホーム、好きだよねえ。
凜子 まあ、子どもも独立しちゃつてるんじゃない？
良成 そういや、十文字さん、家族のことしゃべんないね。
凜子 そうなの？
良成 まあ、俺が覚えてないだけかも知れないけど。
莉菜 誰か結婚するの？
凜子 え？ なんて？
莉菜 だつてさつき、家庭がどうか……。
凜子 ああ、山崎君ね。
莉菜 え？ 山崎さん結婚するの？
凜子 いや、そこまで行つてるかどうかわかんないけど、なんか、
彼女はいるみたい。

莉菜 そっか……。

良成 まあ、結構いい歳だからね。

莉菜 彼女いたんだ……。

良成 ずいぶん前にいた時期があつて、んで、しばらくいない時期もあつて、んで、最近はよく分かんなかった。

凜子 莉菜、うち戻って宿題やんなさい。あ、夕飯出来てるからご飯よそったりしてて。

莉菜 どっち先にやればいいのか？

凜子 家族のために。

莉菜 ……はい……。でも、片付けとかしてからでいい？

凜子 はいはい、いいからいいから。早く帰りなさい。

莉菜、下手へ去ろうとする、

凜子 何でそっちに行くのよ。

莉菜 だって、チャリ表。

良成 わかったわかった、カギ閉めるから……。

莉菜、良成、下手へ去る。

3 | ⑧

一人残る凜子。ため息を大きく一つつき、辺りを見回す。

凜子 あ、莉菜のヤツう。

凜子、壁際に立てかけてある掃除道具を持ってくる。と、カステラのかけらを掃除する。

ビデオが目に入る。何気なく近づき、スイッチを入れる。モニターを見て軽く首をひねる。

そこへ、良成が戻ってくる。

良成 俺やるから！ 俺、やるから！

凜子 あ、うん……。

良成、ビデオを素早く移動させる。

凜子 あのさあ……。

良成 なに？ なんか写ってた？

凜子 え？ あ、いや、そうじゃなくて……ちよつと城東小学校

から電話あつてき。
良成 うん。
凜子 来年から入札にするみたい、卒業アルバムとか……。
良成 え？
凜子 うん……。
良成 そつかあ……。
凜子 御料小学校と外川中学校も閉校でしょう？ まあ、あそこは仕方ないとしても……。
良成 経費節減か？
凜子 岩瀬くんに言われたのは……。
良成 岩瀬先生ね。
凜子 やっぱフィルム現像と、あと、人件費……。
良成 うん……まあ、そうだよなあ……。
凜子 山崎君、結婚するとなるとさ……。
良成 どうすっかなあ……。
凜子 まあ、すぐにどうこうつてあれじゃないけど……。
良成 うん……とりあえず、名前戻してみるか？
凜子 ええっ？
良成 十文字さんにも言われちゃつてさ、戻した方がいいんじゃないって……。
凜子 うん、それはまあ、あんまり関係ないかも知れないけど。
良成 んじゃ、並べてみるか、S M A X 坂下写真館。
凜子 くだい……。
良成 坂下写真館 M A X。
凜子 電話に出るとき恥ずかしい感じがすると思う。
良成 M A X 写真館。
凜子 だからそういう問題じゃなくてね、店の存続に関わる問題だからね。
良成 でもさ、経費節減は守りの経営でしょ。攻めの経営で何とかな。
凜子 名前をどうこうするのが攻めか！
良成 いや、そういうことじゃなくて、あの、新しいカメラ買わないと……。
凜子 なんですと？
良成 もう、今の、型落ち……。
凜子 なんですと？
良成 新しいデジイチを……。
凜子 なんですと？
良成 ……売り上げと相談するから……。
凜子 なんてデジタルになっちゃったかなあ……。

良成 そうなんだよね。フィルムカメラはさ、ちゃんとメンテすればまあ一生ものだったでしょ。でも、もういまは3年、5年で陳腐化しちゃうから。印刷屋さんとかもデジタル入稿じゃないといろいろめんどくさくなっちゃってるし。今のヤツはさ、こないだ最新型の見ちゃったのね、そしたらやっぱり違うじゃない。いんだ、これが。でね、処理速度が速いの、もう速いの。でも、そうなるよ、パソコンの方もね、バージョンアップしなきゃいけないよ、永遠に続く設備投資……。

良成が力説する間に、凜子は険しい表情でソファに座る。良成はなだめすかすように凜子に話す。

ゆつくりと暗転しそうになると、下手から声がする。

山崎(声) ただいま戻りましたー。

明かり戻る。

良成 あ、山崎くん帰って来た。

凜子 それとなく探り入れてみて。

良成 え？ 何？

凜子 彼女のこと。

良成 ええーっ？ あ、俺ちょっとビデオ片付けてくる。

良成、素早く上手へ。

凜子 逃げた……。

3 | ⑨

山崎、下手から登場。

その後を付いて莉菜登場。

凜子 あらお帰りなさい。

山崎 あ、奥さん。ただいま戻りました。

凜子 お疲れ様です。ん？ なんで莉菜までいるの？ あれ？ 今日

現場から直帰じゃないの？

山崎 そのつもりだったんですけど、データだけ落としてから帰ろうかなって。

凜子 で、莉菜は何してんの？

莉菜 お母さんこそ何してんの？

凜子 お父さんに逃げられた。

山崎・莉菜 え？

凜子 いや、逃げられたってあれよ、そんな深刻なあれじゃなくて、ちよっと逃げられただけよ。

山崎・莉菜 ああ、ああ。

凜子 莉菜、早く帰りなさい。何も用事ないんだから。

莉菜 あたしが山崎さんに用事あるの。

凜子 どんな？

莉菜 え？ 文化祭の写真撮りに来てくれないかなあって……。

凜子 そんなのお父さんに頼めばいいじゃないの。

莉菜 お父さんは、忙しいでしょうよ。

凜子 山崎くんだって忙しいでしょうよ。

山崎 莉菜ちゃんて、東高だっけ？

莉菜 はい。

山崎 俺も東高だからさ、いいよ。まあ、日にもよるけど、仕事になればいいですけどね？(凜子に)

凜子 まあ、そうねえ、東高の何か、お仕事になればいいよねえ。

山崎 学校は、今あれだよ？ 許可とか必要だよ？ 撮影するの

に。 莉菜 だと思えますけど、いろいろ、変なことになっちゃうといけないので。

山崎 だよねえ、女子高生の写真撮りたくてうずうずしてる輩いっぱいいるからね。

凜子 そんなにいっぱいいるの？

山崎 そのためだけに望遠レンズ買うようなね。

凜子 そんな輩相手でも、商売だから売っちゃうのよねえ。

山崎 いつなの？ 文化祭？

莉菜 9月25日。

山崎 え？ すぐじゃん！ ちょっと、調整できるかなあ。

莉菜 終わったら、見所あちこち案内するんで。

山崎 東高の文化祭ってカオスだからね。俺らの頃も生物準備室とか体育館倉庫とかわけのわからないところでなんかやってたからね。

凜子 そんな変な文化祭なの？

莉菜 去年来てないもんね。

凜子 だって、来るなって言うから……。

山崎 変な文化祭なんですよ。

莉菜 うん、変なの。

凜子 変な文化祭ねえ。

山崎 ……あ、ちよっと予定見てきますね。

凜子 莉菜、あんた大学行きたい？

莉菜 な、何急に？

凜子 どうなの？ 行きたいの？ 行きたくないの？

莉菜 んんーっ、まだ良くわかんない。

凜子 んじゃお嫁さん行きたい？

莉菜 ええ？ な、何言ってるの？ どうしちゃったのお母さん。

凜子 まあ、大してどうもしてないんだけど、なんかやりたい仕事とかある？

莉菜 なに？ なに？ なんなの？ なんだかめちやくちやな質問なんだけど。

凜子 何言ってるの！ ベクトルは一緒でしょ。

莉菜 は？

凜子 将来ってベクトルは一緒でしょうよ。大学行きたいか、お嫁さんに行きたいか、やりたい仕事につくか。

莉菜 でもなんで今急にそういう話になるの？ 今急に言われたってそんな、わけわかんないよ。

凜子 まあ、聞いてみただけだから。でも、そろそろこちらの、保護者としても体制は整えておかないといけないわけで……。

莉菜 でもなんで今？ お腹空いてるから？

凜子 お腹は……空いてるけどね。

莉菜 カステラあるよ。

凜子 ああ！ さっきカステラのかげら床にこぼしたままいなくなっただでしょ！

莉菜 あれえ？

凜子 あれえじゃなくてさ、そういうところちゃんとしなさいといろんなことちゃんとしてできなくなっちゃうよ。

莉菜 わかった、わかったから。

凜子 わかっているならちゃんとしなさい！

莉菜 ぐちぐちぐちぐちうるさいなあもう。

莉菜、下手へ出て行くこうとする。

凜子 ぐちぐちぐちぐち言われるのがいやならいろいろちゃんとしてくださいよ、ちゃんとしてないからぐちぐちぐちうるさいく言われるんですよ！

莉菜 はいはいはいはい。
凛子 ハイは一回！
莉菜 はーーーーーい。
凛子 伸ばさない！

莉菜、下手へ去る。

凛子 どうしてああ細かくイラツと来るようなことするかなあ。……
：血だな、あたし以外の……。

3—⑩

山崎、戻ってくる。

山崎 大丈夫みたいって、あれ？ 莉菜ちゃんは？

凛子 逃げた。

山崎 え？

凛子 カステラこぼしたまま掃除しないでなくなったの怒ったら。

山崎 今日は、良く逃げられる日ですねえ。

凛子 そう？

山崎 東高の文化祭、行けそうなんで、ちょっと営業かけてきますね。
知ってる先生いればいいんだけどなあ。

凛子 山崎くんさあ……結婚するの？

山崎 え?! な、なにが？

凛子 なにがじゃなくて、結婚する予定ある？

山崎 いや、予定というか、予定は無いですけど、予定は未定で決定ではないと……。

凛子 なにを言ってるの？

山崎 彼女はいます。

凛子 ……ほう……で？

山崎 まだ結婚というほど、機は熟してません。あの、式はできるかどうかわかんないんですけど、もしアレだったら、写真の結婚式みたいなので、社長に撮影お願いしたいんですけど、ってまあこれはずいぶん前から考えてて、というか、前の彼女るときにはそうしようかって言ったら、なんか、こう、終了って感じになっちゃって……。

凛子 そうなんだ……。

山崎 っていうか、その、まだ付き合ってる日が浅いんで……どこでそんな情報を手に入れたんですか？

凛子 間者を放ってるの。

山崎 え？ か、間者？

凜子 ……山崎くんさあ……。
山崎 ……はい？
凜子 ……やっぱいいや。
山崎 え？ なんですか？
凜子 まあ、今じゃなくてもいいから…。
山崎 え？ それって、なんか重大なアレですか？
凜子 これから先、どう転ぶかわかんないしね……。
山崎 ちよつ、ちよつとお願いしますよ、もったい付けないでくださいよ。
凜子 いや、もったい付けてるわけじゃなくてね……。
山崎 いやいやそういうの気になっちゃって眠れなくなっちゃうんですよ。それ聞くまで帰れませんよ。
凜子 残業代も大して出して出していないのにねえ。
山崎 いやいや、それはまあ……。
凜子 独立って考えてる？
山崎 え？
凜子 カメラマンとして一本立ち……。
山崎 ……えっと、まあ、考えないことはないですけど、今ね、独立しても、ちよつとやっていけないんじゃないかと思うんですよね。
凜子 結婚は、そうするとすぐってわけでもないのね？
山崎 ええ、もちろん、まあ、すぐっていうか、そういうことになるかどうか、不透明というか半透明というか……。
凜子 半透明ね……。
山崎 はい……。
凜子 とすると、すぐに妻子持ちになるってわけではないのね。
山崎 もう、それは、ないです。っていうか、そんなにすぐにアレだったら出来婚ですよ？
凜子 授かり婚とか言い換えるらしいよ、今は。
山崎 どう言っても出来婚は出来婚でしょう。
凜子 いや、だっておめでたいことなんだから。
山崎 そんな出来婚なんて、後先考えないバカヤロウがやることですよ。
凜子 あらそう？
山崎 もう、そういう勢いでどうこうする歳でもないんで。
凜子 まあ、そうよねえ。
山崎 ええ、まあ……。
凜子 でも、いづれ一本立ちって事は考えないでもないのね？
山崎 ……あの……それは……遠回しに……。

山崎、黙ったまま親指で首を切る。

凜子 いやいやいやいや、そう決まったわけじゃなくて……。

山崎 決まったわけじゃない？

凜子 いやいやいやいや、あの、今後の情勢次第で、できる限りのことは、悪あがきでもするつもりなんで……。

山崎 ……悪あがきかあ……。

凜子 ああ、ごめんごめん、データ落とすのよね？ 邪魔しちゃいけない邪魔しちゃ。

山崎 いえ……。

凜子 ごめんなさい、あの、あと終わったら、カギ閉めて……ね。

山崎 はい……。

凜子 それじゃ、お疲れ様でした。

山崎 お疲れ様でした。

凜子、上手に去って行く。

下手からこっそり様子を窺っていた莉菜、凜子の去り際に顔を出す。

山崎 独立ってかあ……。

3—⑫

莉菜 ……山崎さん……。

山崎 え？ あ、莉菜ちゃん。大丈夫みたい、文化祭。

莉菜 やたつ。

山崎 何時頃行けばいい？

莉菜 何時頃……。

山崎 莉菜ちゃん、なんかやるの？

莉菜 あの、まあ、合唱なんですけど、一部ソロあって、で、あたし歌っちゃうんです。

山崎 なるほど、で、それを撮って欲しいと。

莉菜 はい。

山崎 でも、それほんとはお父さんお母さん見たいんじゃないの？

莉菜 親は……ちよつと……。

山崎 そうかあ……で、何時頃？

莉菜 ……あとで、ちゃんと……。

山崎 まあ、あつちこつち撮ってみるんで、余裕持って行くけど。アレだよな？ わけのわからない場所じゃないよね？

莉菜 あ、それは大丈夫です。一応、花の森ホールで。

山崎 おお、花の森ホール、懐かしいね。俺らの頃はもうぼろっちかっ

たけど、今でもぼろっちいの？

莉菜 今は結構きれいですよ。

山崎 あ、そうだ、震災のあと直すついでに改装したんだ。俺んこにも寄付金のお願いとか来たもん。

莉菜 うちにも来たのかな？

山崎 いや、わかんないけど、もう十年くらい前だよ。多分、あ、もつと前かな？ でも、社長も奥さんも東高じゃないでしょ、確か。

莉菜 あ、だと思えます。

山崎 なら来ないでしょ。

莉菜 ……山崎さん、やめちゃうの？

山崎 え？ なんで？ やめないよ、やめないよお。

莉菜 だって、なんか、独立って……。

山崎 いやそれは、その、俺が独立したいっていうアレじゃなくてね、なんとというか、うーん、どうなのかなあ。

莉菜 山崎さん……。

山崎 はい……。

莉菜 ……やめないでね……。

山崎 はい……。

莉菜 あと……。

山崎 え？

莉菜 あ、やつぱいいや。

山崎 ええ？！ ちよつ、ちよつとそういうのやめてよ。気になって眠れなくなっちゃうんだから。

莉菜 ホント？

山崎 うん……だから、なに？

莉菜 内緒。

山崎 ええーっ。

莉菜 お疲れ様でしたー。

莉菜、下手へ出て行くこうとする。

山崎 ちよつと莉菜ちゃん！

莉菜 眠れなくなってるね。

莉菜、下手へ去る。

山崎 ええーっ……。

暗転。

4 一年後の秋①

明るくなると、寛志、棗がソファーに座ってお茶を飲んでいて、十文字が傍らに椅子を持って来て座って話をしている。

十文字 ああ、去年も撮影されたんですね。

寛志 なんかね、生き延びちやいましたからね。

十文字 生き延びた……。

棗 今日はよろしくお願ひします。

十文字 あ、よろしくお願ひしますって言っても、わたし撮影できるわけじゃないんですが。

寛志 なんか縁起いいって言うか、去年もここで遺影撮ってから体調良くなりましたね……。

棗 ホントにね、昔の人は写真撮ると魂抜かれるって思ってたらしいですけど、なんか悪いものが抜かれたのかも知れないですね。

寛志、おもむろにカツラを外す。

寛志 髪の毛がね、抜かれたよ。

十文字 ああ、か、カツラですか……。

寛志 抗がん剤はね、やっぱりやられちゃうんだね、大分戻って来た感じなんですけど、

棗 あの、今日社長は？

十文字 ああ、今日は見てないですね。

寛志 山崎くんは？

十文字 いますけど、ちよつと奥行ってます。

寛志 んじゃ今日は山崎くんに撮ってもらうのかな？

棗 そうなるんじゃないかな。

寛志 十文字さんは撮影はやらないんですか？

十文字 ああ、わたしは風景専門なんです。

寛志 人物は、撮らない？

十文字 人物は、残ってても、なくしても、なんか悲しくなっちゃうんでね。

棗、バッグから写真を一枚取り出す。

棗 これ、去年の遺影なんです。

十文字 ああ……。

棗 まあ、これは遺影には使えないんですけど、その時にお遊びで撮ったヤツで。

十文字 ああ、これなら、そんなに悲しくならないですね。
棗 でしょう……。

寛志 十文字さんて、二戸ですか？

十文字 まあ、辿れば二戸あたりだと思いますけど、今は盛岡で……。
寛志 ああ、今は盛岡でねえ……。

十文字 ……えっと、それじゃアレですね、ちよっと、呼んできますね。
社長か山崎くんか……。

棗 お願いします。

十文字、上手へ去る。

4—②

十文字を見送り、残る寛志と棗。
棗、寛志の後頭部を指で撫でる。

寛志 なに？

棗 うん、ちよっと……。

寛志 ちよっと、なに？

棗 なんか、ちよっと生えてるかも……。

寛志 おお、生えてきたか……。

棗 うん……。

寛志 この調子で全体生えたいね。

棗 生えて欲しいね……。

棗、手のひらで寛志の頭全体を撫でる。

寛志 気持ちいいの？

棗 うん、けつこうささらさらしてる……。

寛志 あ、そう……。

棗 あったかい……。

棗、寛志の頭に頬をくつつける。

寛志 ……なにしてるの？

棗 ……なんでもない……。

棗、頭につけていた頬を離す。

棗 あ……。

棗、頬をつけていたところをこする。

寛志 なに？ なに？ どしたの？

棗 ファンデーション、付いちゃった。

寛志 ああ……。

棗 ごめん……。

寛志 いやいや……。

寛志、カツラをつける。

寛志 曲がってない？

棗、カツラを整える。

4 | ③

下手から、凜子入ってくる。

凜子 ああ、いらっしやいませーって、岩渕くんどうしたのその髪型！

寛志 ツラ。

凜子 ツラ？

棗 カツラです。

凜子 カツラ、なんでまた……。

棗 今まで絶対やらなかった髪型にしてみたかったですって。

凜子 でもそれ、文化祭で女装した時の髪型に似てない？

棗 女装？

凜子 セーラー服着て、女装バンド。

棗 ええーっ！

寛志 そんなに驚くことでもないですよ。

棗 驚きますよ。女装って、ええーっ、女装？

凜子 女装ガールズバンド。ボーカルよ。

棗 まさかそんな過去があるとは……。

寛志 まあそれはいいからいいから。

棗 なんでそんなこと知ってるんですか？

凜子 だって、同級生だもん。

棗 ああ……。

凜子 中学高校の同級生なのあたしたち。

棗 どんな高校生でした？

凜子 ん？ このまんま。

棗 このまんま？

凜子 ほとんど変わんないね。多少はシワ深くなったけど。

棗 このまんまで女装ガールズバンド……なんかどうなのか想像つかない……。

凜子 卒業アルバムに写真残ってるはずだよ。

棗 見たいですね。

凜子 うーん……さすがにすぐには見つからないかも知れないけど。

棗 そうですよねえ……。

寛志 ……俺、死んでからにして……。

凜子 ……そこまでか……。

棗 ……んじゃ、見なくていい。

寛志 子どもには、見せてもいい……。

棗 ええーっ？ なんで？ なんで？

寛志 なんでだろうねえ、なんか、そんな気がしたんだよね。

棗 そんな気がしたって……。

凜子 あの、山崎くんは？

寛志 なんか、あの、十文字さん？ が呼びにいつてくれるけど。

凜子 ああ、十文字さんが……。

寛志 あの方は、どういうアレなんですか？

凜子 ああ、まあ、フィルムカメラの愛好家で、常連さん。写真教室と
かもずつと来てて、ときどき手伝ってくれたりする、ありがたいお客
様です。

寛志 ああ、バイトみたいなもんですか。

凜子 バイトっていうか、業務用のフィルム現像機、あげることにした
んですよ。

寛志 ああ、ついにね。

凜子 で、その使い方教えて欲しいって……。

寛志 下取りとかは、売れないの？

凜子 もはやそんな状況ではないみたいですよ、フィルムは。

寛志 そうかあ……まあ、悪くない選択だと思うよ。フィルム愛好家つ
ていったって、もうほとんど絶滅危惧種でしょ？

凜子 絶滅危惧種ね。

寛志 ニホンオオカミ、カワウソ、トキ……。

棗 それって絶滅種じゃない？

4 | ④

十文字 (声) ずいぶんとうらやましい感じですよね。

山崎 (声) 奥さん若いんですよ。

十文字 (声) 毎年撮ってるんですか？

山崎 (声) 去年は撮ってましたね。

上手から山崎と十文字登場。

十文字 お待たせしました。

山崎 いらっしやいませ、準備、出来てますんで。

凜子 (つぶやく) 絶滅危惧種……。

棗 んじゃ、行きましようか。

寛志 行きましよう。

棗、立ち上がる。

寛志、ゆつくり立ち上がろうとするが、一度座り込む。

寛志 はあぁー。

何とも言えない表情で寛志を見る周りの人。

凜子 セーラー服、あるよ。

棗 え？

凜子 セーラー服、岩渕くんに着せて撮ってみようか。若返るんじやないかな。

山崎 セーラー服？ え？ 岩渕先生に？

凜子 うん……。

山崎 奥さんじゃなくて？

凜子 うん……。

山崎 奥さんじゃなくて？

凜子 うん……。

山崎 奥さんじゃなくてかぁ……。

棗 いや、あたしだって今セーラー服って、そりやなんかいろいろ違ってたアレになっちゃうでしょ。まあ、セーラー服はね、今さらでも着てみたくないこともないんですけど……。

寛志 そうなのか？

棗 いや、あの……今日の衣裳、あっちにかけてきます。

棗、上手に走り去る。

山崎 入るかな？ あ、入るか。うん、入る入るって、何でまたセーラ

ー服が？

凜子 そういう話の流れがあるのよ！

山崎 ああ、はいはい、なるほど、そういう流れですか。

十文字 んじゃ、セーラー服、準備ですか？

凜子 いやいや、それは大丈夫です。

寛志 セーラー服かあ、俺も学生服で合わせてみるか……。

凜子 それはちよつと、のちのち後悔するような写真になっちゃうんじゃない？

寛志 ……そうだよね……さてと……。

寛志、今度はしつかり立ち上がる。

山崎 んじゃ、参りますか。

寛志 参りましょう。

寛志、ゆつくりと上手へ。その後ろをついて行く山崎。

4—⑤

見送り、残る凜子と十文字。

十文字 なんか、去年も遺影撮りにいらしたとかで……。

凜子 余命宣告されてたんですよ、去年、すでに。

十文字 ああ、それでか……。

凜子 ん？

十文字 生き延びちゃったって……。

凜子 去年よりも流石に弱ってるねえ……髪の毛も抜けちゃって……。

十文字 それでも、写真撮っておきたいんですかねえ？

凜子 たまたまなんでしょうけど、去年、遺影撮ってからちよつと回復して、それで、なんか、一年経ったらまた撮るってことらしくて。

十文字 残った写真、見たいかなあ……。

凜子 わかんないですけどね。去年は奥さんの方がなんとしても撮りたいってことで、なんか、無理矢理連れてきたような感じだったんですけど、今年は、岩渕くんの方から遺影撮りに行くぞって言ってたらしくて。

十文字 ゲン担ぎですね。

凜子 そっかあ、ゲン担ぎがうちの写真の売りってことになれば、うちで写真撮ると縁起がいいってことになれば、もしかしたら違った展開見られるかも知れないわね……。

十文字 それはなんか、アリですね。御利益のある写真館。

凜子 もう一年、生き延びてくれないかなあ。

十文字 遺影撮ると長生きするって、そういう評判が立つといいですね。独身で家建てるって結婚できないみたいな……。

凜子 そのたとえは……うんうん、まあ、ねえ……長生きって言うよ
り、縁起がいいって方が、いろんな世代に来てもらえそうですね。
十文字 縁起のいい写真館S M A X。
二人 うーん……。

凜子 わらにもすぎる思いなのかな……。

十文字 残される方は、辛いですよね……。

凜子 清志郎のラブミーテンダー、歌ってたなあ……ガールズバンドで
……。

十文字 はあ……。

凜子 長生きしたいだろうに……まだ子どもも小学校上がってないん
ですよ……。

十文字 でもまあ、順番逆じゃないから幸せですよ。

凜子 ……まあ、そうですね。

十文字 順番、逆じゃないから……。

凜子 え？

十文字 あ、お茶、片付けますね。

凜子 あああ、いやいや、あたしが片付けますから。

十文字 いやいやいやいや。

凜子 いやいやいやいや。

お茶道具を取り合いながら、互いに譲らず、それぞれ手にお
茶道具を持って去る。

4 | ⑥

上手から、棗戻ってくる。

辺りを見回すが、誰も居ない。

崩れるようにソファに座り、声を殺して泣き始める。

キツチンの方から十文字戻ってくる。

ソファの棗を見つけると。

十文字 ……あの、大丈夫ですか？

慌てて十文字の方に向き直り、何事もなかったかのように取
り繕うと。

棗 ふぎけた顔しかしないんで、なんか、腹立って来ちゃって……。

十文字 さっきの写真みたいなの。

棗 アレなんかまだいい方です、もっと変な顔ばかりして……。

十文字 戦ってるんですねえ。

棗 戦ってる？

十文字 迫り来る運命とか宿命とか、そういったものと。

棗 そう、なんでしようか……？

十文字 奇跡が起こらないかなーって思ってるんですよ、たぶん。

棗 変な顔で？

十文字 変な顔で。

棗 変な顔で奇跡って起こるんでしょうか？

十文字 うーん、わたしも奇跡の専門家じゃないんでねえ、でも、思いも寄らないところで起こるから奇跡なんじゃないですかね。

棗 そうですよ、そうですね！

十文字 あ、いや、でも、奇跡ってのはまず滅多に起こらないから奇跡なんで、祈るのはいいんですけど、期待しちゃうけませんよ。

棗 ……祈るしか出来ませんか……。

十文字 お子さんいるんでしょう？

棗 ええ、来年一年生です。あと、その下と。

十文字 助けてくれますよ、その子たちが。

棗 助けてもらったんですか？

十文字 ……あ、いや、実は……仕事で、沿岸にいたんですよ、震災の時に……。

棗 ああ……。

十文字 流された写真だけは、結構戻って来て……。

棗 写真だけ……？

十文字 ……なんか、戻って来た写真も見られなくてね……。

棗 ……あの、あだし、おばあちゃんちの仏壇っていうか、仏間が怖くて、あの、無表情みたいな、怒ったみたいな、先祖代々の遺影が並んで、それが怖くて……。

十文字 ああ確かにね。

棗 学校の音楽室とかもなんか作曲家の顔写真ずらっと並んでてちょっと怖いじゃないですか。

十文字 ベートーベンが怖いんだよなあ。

棗 あたしはチャイコフスキーでした。

十文字 滝廉太郎とかも悲しげな顔してましたね。

棗 だからなんか、あんまり怖くないような、そういう写真にしたかったです。

十文字 それで遺影を……。

棗 あたし、おじいちゃん子だったんですけど、遺影になったら、その大好きだったおじいちゃんが怖くて怖くて、でも、そうやって怖いって思ってるのが、なんか悲しくて……。

十文字 人それぞれですねえ、僕なんか遺影撮っても、怖がってくれる人なんか誰も残ってませんよ……。

棗 ……すいません……。

十文字 いやいや、不幸なんて、人と比べるもんじゃないんですよ。不幸だと思っから不幸なんで、誰にでも降りかかってくるってことなんですから……まあ、当たり前のことなんですよね。

棗 それは、頭ではわかってるんですが……。

十文字 頭ではわかるんだよねえ、頭では……。

棗 でも、やっぱり……。

十文字 結局、時の経つのを待つしかないよね。真っ只中にいる時はそれどころじゃないだもん。

棗 ありがとうございます。

十文字 泣くことを恐れずに、泣くことは、悲しみに溢れたあなたの心を解き放つ。

棗 それは……。

十文字 ネイティブアメリカン、ホピ族のことわざ。

棗 はあ……。

4—⑦

凜子、戻ってくる。

凜子 あら？　なんか、微妙な空気が流れてませんか？

棗 え？　微妙な空気？

凜子 なんとというか、ちよつとわかり合っちゃったみたいなの……。

十文字 何にもないですよ……。

凜子 聞こえましたよ、ホピ族のことわざ、とかなんとか……。

十文字 ネイティブアメリカンはことわざとか格言の宝庫なんですわね。特にホピはね、いいんですよ。

棗 ネイティブアメリカン、お好きなんですか？

十文字 好きって言うか、救われました……。

棗 ああ……。

凜子 あ、ほら、なんか、なんかわかり合ってる。

十文字 いやいや別にそういうんじゃないですよ、ねえ。

棗 ええ……。

凜子の携帯が鳴る。

凜子 そこ！　そういうところ！

十文字 誰の携帯ですか？

凜子 あ、あたしです。

棗 あの、向こう、見てきます。

棗、そそくさと上手へ去る。

十文字もそれに続き。

凜子は携帯に出る。

十文字 そうですね、わたしもちょっと、手伝いあれば……。

十文字も上手へ去る。

凜子 はいもしもし……ああ、すみません……はい、えっとですね、ちよっとお店の方に、閉店頃に来ていただけますか？

内線の電話が鳴る。

凜子 ……はい、7時頃ですね……はい、はい、よろしく願います。

凜子、携帯を切り、事務室の方へ。

凜子 (声)もしもし……どうしたの？ ……うん……うんうん……
わかった、今行くから、大丈夫大丈夫。

凜子、事務室から出てくる。

凜子 はああー(ため息、そして大きく息を吸い)よしっ。

凜子上手へ去る。

5 閉店近く①

明かりがゆつくりと夕方になり、そして夜。
上手から、凜子と山崎、入ってくる。

凜子 あとやっとかから、そのままだね。

山崎 あ、はい、社長、いつ復帰できますかね？

凜子 それなのよねえ……。

山崎 ちよっとお話ししとかなきゃいけないこともありまして……。

凜子 え?! 独立?!

山崎 いやいやいやいや、え？

凜子 あ、いや、心の問題だからねえ、まあ、誰でも一生に一回くらいはなるって言われてるけど、まさか自分の旦那がねえ……。

山崎 いつ頃なら、お話しできますかね？

凜子 まあ、上手く葉が合ってれば、まあ、あと2、3ヶ月？ 下手すると半年……。

山崎 半年かぁ……半年先だと、ちょっとまずいなぁ……あの、先に奥さんに話してもいいですか？

凜子 ああ、それはまあ、いいけど……。

山崎 実は、入籍するかも知れないんですね……。

凜子 おお、おめでとう！ 婚約、してたんだ、なんだ、言ってよお。

山崎 いや、あの、婚約はまあ、まだしてなくて……。

凜子 え？

山崎 まあ、その、まだちょっと、ちゃんと両親にあいさつしてなくて……。

凜子 ん？

山崎 あの、まあ、なんとというか、その、やっぱ、アレですね、人間いくつになっても勢いってあるんですね。

凜子 勢い……。

山崎 授かってしまいました……。

凜子 ああ……。

山崎 そんなわけで、まあ、社長にも報告しないと思って……。

凜子 大バカヤロウに成り下がったね。

山崎 いやあ、あはははははは。

凜子 何ヶ月？

山崎 あの、ほぼ五ヶ月くらい、かなあ……。

凜子 えええーっ！

5—②

下手から楓登場。

楓 ごめんくださいー。

凜子 ああ、小山さん、お待ちしました。

楓 なんか、驚くような出来事でもあったんですか？

凜子 聞こえちゃいました？

山崎 え？ あ、いや、何でもないですよ。

凜子 彼女に子ども出来ちゃってもう五ヶ月なんですよって。

山崎 ああああー！！

楓 初めてのカミングアウトだったわけですか？

山崎 ちよつ、奥さん、なんでそんなすぐバラしちゃうんですか？

凜子 バラしちゃったことよって、このあと具体的に何か問題が起こるかしら？

山崎 ええーっ、いやいやそういうことじゃないでしょう！

下手から今度は莉菜登場。

莉菜 ただいまあー。

山崎 ダメですよ！ 莉菜ちゃんはダメですよ！

莉菜 え？ なにが？

凜子 お帰りなさい、おやつはないよ。

莉菜 ええーっ。

凜子 だから早く帰りなさい。

莉菜 ええーっ、(楓に気づき)あ、いらっしやいませ。

楓 こんばんは。

凜子 あ、小山さん、こちらへどうぞ……。

楓 あ、はい……。

凜子、楓をソファの方へ案内する。

莉菜 山崎さん、なんかあったの？

山崎 ん？ なにもないよ。

莉菜 えーっ、だつてえ……。

山崎 まあ、強いて言えば大人の話かな。

莉菜 聞きたい。

凜子 山崎くん、ちよつと外してもらえる？

山崎 え？ 俺いなくてどこでなにバラすんですか？

凜子 違う違う、小山さんと別件の話。

山崎 ああ、はい、んじゃちよつと店の方後片付けしてます。

凜子 莉菜も。

莉菜 あ、はい。

山崎、店の方へ、莉菜、一瞬山崎に付いていこうとする。

凜子 莉菜、邪魔しないの。

莉菜、凜子を軽く睨み、とりあえずキッチンへ。

5 | ③

二人がいなくなったのをしっかりと確認する凜子。

凜子 早速なんですけど……。

楓 お電話いただいたてから、ちょっと下調べはしてきたんですが、結論から申し上げれば、入院しないとこちらの保険からは給付できないということになります。

凜子 やっぱりねえ、そうだとは思ったんですけど。

楓 それから、健康保険、どうなってます？

凜子 それがねえ、国民健康保険なの。

楓 ああ、国保ですかあ……。

凜子 このくらいの規模だと大体そうだと思うけど、社会保険どうこうしてる余裕ないのよね……。

楓 となると、傷病手当金出ないですねえ……。

凜子 それって……。

楓 会社で健康保険と厚生年金入ってる場合は、経営者でも、傷病手当金とか出るんですけど……。

凜子 うーん……。

楓 入院してもらおうのが手っ取り早いんですが……。

凜子 入院するんだったら、もうちょっと前だったかなあ……。

楓 ちよつとは元気になってるんですか？

凜子 まあ、寝たきりみたいな時期からは脱してるんだけど……。

楓 今から入院てわけには行きませんか？

凜子 金銭的にはした方がいいってことよね？

楓 手術特約とはありますけど、それ関係無いですもんね……。

凜子 うつ病だからねえ……。

楓 ……あの、ちよつと前なんですけど、免責のこと聞かれたことありまして……。

凜子 免責って……。

楓 その、保険金支払わなくてもいいっていう……。

凜子 ああ、あの、保険金殺人とか……ええっ！ もしかして受取人あたし？

楓 ええ、まあ……。

凜子 いやいやいやいや。

楓 そうじゃなくて……自殺です……。

凜子 ……。

楓 ……。

5—④

キッチンの方から何かお菓子を食べながら莉菜登場。

莉菜 お母さんおやつあるじゃん、ルマンド。

凜子 まだ！

莉菜 え？
凜子 まだ大事なお話中！

莉菜、ルマンドを食べる。

莉菜 あ。

凜子 あーまたこぼした、ちゃんと掃除しなさいよ！

莉菜 はあーい。

凜子 伸ばさない！

楓 ああ、うちも同じこと言っていました。

凜子 そうでしょう？ やっぱりそうよねえ。

楓 シングルで、しかも若かったですから、そういうところきちんとしていないとって……今思えばそんなに肩肘張らなくても良かったんじゃないかと思うんですけど。

凜子 でもそれは……仕方ないですよ……。

いつの間にか莉菜がいなくなっている。

凜子 あ、莉菜のやつうー！ こらーっ！ 莉菜！ 掃除しなさい掃除！

莉菜再登場。

莉菜 まだ大事な話あるんじゃないの？

凜子 いいから掃除しなさい！

莉菜 はいはい。

凜子 はいは一回！

楓 ああ、それも。

5—⑤

山崎、店の方から戻ってくる。

莉菜は掃除を始める。

山崎 もうあらかた片付いてましたね。あの、カギは閉めないでおきましたよ。お店の方から出ますよね？

楓 ええ、ああ、はい。

山崎 小さい電気は点いてますけど、暗いんで店の中気をつけてくださいね。

楓 その、出来ちゃった彼女は、若いんですか？

山崎 え？

山崎 え？

山崎 ああつ、また、またバラした！ もうー。

山崎 あ、すいません。

山崎 出来ちゃった彼女？

山崎 莉菜ちゃん、あの、それはね……。

山崎 遅かれ早かれバレるモンよ。こういうことは。

山崎 わかりました、わかりましたよ！ そういう仕打ちなんですね？

凛子 そういうことじゃないの、山崎くん。だって、おめでたいことでしょう？ そして問題は、ここでバレることじゃなくて、この先どのよう

山崎 まあ、そりやそうなんですけど……。

凛子 とすれば、この問題に対して、わたしたちは一丸となって、みんな

山崎 なで協力して事に当たらなければならぬと思うのよ。

山崎 山崎さん。

山崎 え？

山崎 不潔。

山崎 えええーつ。

莉菜、山崎に掃除道具を押しつける。

山崎 莉菜ちゃん……それはあの、もうだって、俺たちの中では結婚して

ことは既定路線でね、ただ、まだそれを周りに広報というか周知と

いうか、報告してなかっただけであって……。

山崎 でも、お相手高校生とかってわけじゃないんでしょ？

山崎 え？ もちろんもちろん。結構いい歳です。まあ、三十にはなっ

てませんけど、瀬戸際くらいで。

山崎 二十九かあ……。

山崎 ええ、まあ、はい。

山崎 あたし、宿題やんなきゃ。

莉菜、下手へ去る。
見送るみんな。

5 | ⑥

凛子 山崎くん……。

山崎 はい……。

凛子 やめないでね。

山崎 あれえ？ 去年は遠回しにクビみたいなこと言われてましたけどねえ。

凜子 状況が変わったの。

山崎 いや、やめませんよ、やめませんけどね……。

楓 ご家庭持つとなったら、アレですよ、万が一の時のこと考えなきやいけませんよね、特に、お子さんいらっしやるとなったら。

山崎 そりゃまあ、そうですね……。

楓 最低限の保障、お考えになつてはいかがでしょう？

凜子 おおっ、保険外交員営業モードに入った。

楓 まあ、一応は……。

山崎 いやいや、そんな、保険料なんて払えませんよ……。

凜子 ごめんね山崎くん、うちの人が復帰して、それなりに売り上げも見込めるようになったら、ね……。

山崎 いやいや、それは……。

楓 まあ、いずれ考えていただければ、ぐらいで。いつでもご相談に乗りますので。

山崎 ああ、んじやまあ、その時は……。

楓 でもまあ、お相手がそのくらいの歳で、山崎さんも定職持つてるわけですから、よほどのことがない限りちよっと嫌み言われるくらいでなんとかなつちやうでしょう。

山崎 だとありがたいんですが……。

楓 大丈夫ですよ、あたしみたいに高校生じゃないんですから……。

山崎 やっぱり、子育てつてお金かかりますか？

凜子 小児科はとにかく通ったなあ。そんなに病弱な方じゃなかったけど、それでもかなり通ったもんね。

山崎 病院代かあ

凜子 ここは小学校上がるまでは無料だけど。

山崎 そうなんですか？

凜子 まあ、一回は払うんだけど、戻ってくるのよ。いちいち書類書かなきゃいけないからめんどくさいんだけど、ね？

楓 え？ ああ、そうなんですか？

凜子 あれ？ 市役所とかからもらいますよね？ 保険証番号とか書いてお医者さんとか薬局とかに出す……。

楓 ああ、うち、それ、いろいろ全部まとめてやってもらってたんで……。

凜子 ああ、実家のお母さんとかね。

楓 いやいや、追い出されてますから、実家は。その、味方になつてくれたのは、父方のおばあちゃんだけで……。

凜子 ん？

楓 防衛省児童福祉奨学金というのがありました……。

山崎 防衛省？

楓 自衛隊に入ることと条件に、子どもに関わる面倒とか、見てくれるんですよ。全部、生活も……。

凜子 子どもが？

楓 そう、大きくなったら自衛隊。

山崎 将来決まっちゃうのか……。

山崎、手にしていた掃除道具で何となく掃除を始める。

楓 ホントに助かりました。親にも見放されて、お金もないし、でも子どもは育てなきゃいけないし……。

山崎 自衛官も公務員だしな……。

凜子 退職してからの再就職もいいみたいだしねえ。

楓 でも……やっぱり……。

メールの着信音。

楓 あ、ちょっとすみません。

携帯を取り出す楓。

凜子 んじゃ、山崎くん、上がって。

山崎 あ、はい。

山崎、掃除道具を片付ける。

凜子 出来ちゃった話は適当に折を見て話しくんで……。

山崎 あの、号外みたいにはらまくのはやめてくださいね。

凜子 大丈夫大丈夫。

山崎 心配だなあ。

楓 噂をすれば駿でした。

凜子 ああ。

楓 臨時休暇もらえたみたいで、帰ってくるそうです。

凜子 それじゃまた、良かったら写真撮りにいらしてください。

楓 ええ、流石に一年経ったから、制服もなじんでるでしょうね。

山崎 腕を上げときます。

楓 お願いします。

山崎 んじゃ、お疲れ様でした。

凜子 お疲れ様でした。

楓 お疲れ様でした。

山崎、事務室の方へ去る。

5—⑦

凜子 ……ちょっと、気が紛れた……。

楓 ですから、十二分に気をつけてください。保険金は出ますけど、ご家族の後悔はお金でどうこうできるもんじやないので……。

凜子 ありがとうございます。十分目配りします。

楓 一人で背負い込まないでくださいね。奥さんの方が参っちゃいますから。

凜子 いやあ、あたしの方が先に参っちゃってもおかしくなかったんですけどねえ。

楓 あの、一番悪い時よりも、ちょっと良くなってきた頃が危ないらしいので……。

凜子 気をつけます……。

楓 もし、入院となったら、連絡いただければ……。

凜子 あ、はい……。

山崎、事務室から荷物を持って出てくる。

山崎 なんだか何回もあいさつしてすみません、お疲れ様でした。

楓 あ、あたしもそろそろ失礼します。

凜子 ああ、ごめんなさい、お茶も出さないで。

楓 いえいえ、お構いなく。

山崎 あ、じゃあ、閉めますか？

凜子 いやいや、あたしやるから、大丈夫。

山崎 んじゃ、お願いします。

楓 それではお邪魔しました。

山崎、楓、下手へ去る。

見送る凜子。

ふと、辺りをじっくりと見回す。大きく息をつき、下手へ去る。

6 深夜①

ゆっくりと明かりが落ち、薄明かりになる。

閉店後の深夜。遠くで救急車のサイレンが聞こえる。

上手から、ビデオと三脚を持ってパジャマ姿で裸足の良成登場。

三脚を真ん中あたりに置くと、事務室の方へ。
部分的に明かりがつく。
事務室から戻るとビデオをソファに向けスイッチを入れる。
ソファに深く座ると、意外なほど明るい声で語り始める。

良成 みんな元気か？ お父さんは、ご覧の通り、あんまり元気じゃない……でも、大分元気にはなってきた。仕事には復帰できないけど、みんなは元気でいてくれ……もしかしたら、みんながこれを見る頃には……。

良成 さめざめと泣く。

良成 はあーっ……ダメだなあ……お母さん、莉菜、それから……
連……あと、山崎くん……いや、山崎くんは、別かあ……ごめん……
ごめん……ごめん……俺がすっかりしてないから……。

良成、顔を手で覆い、泣いている。

と、上手から、パジャマ姿の莉菜やってくる。

良成をしばらく見ているが、ゆっくりと近づいていく。

気配に気づいた良成が顔を上げ、涙を拭き、とりつくろう。

良成 ああ、莉菜、どうした？

莉菜 お父さん……。

良成 なに？

莉菜 ……あたし、進学しなくてもいいかな？

良成 なんて？

莉菜 いや、なんか、何となく進学してたけど、進学してなにをするのかって、よくわかんないんだ。

良成 その、良くわかんないからとりあえず学校行っとけば良いんじゃないか？

莉菜 あの……お店、手伝ってもいいかな？

良成 え？

莉菜 ……あの、ね、あたしちっちゃい頃っていうか小学生の頃、山崎さんのお嫁さんになって、このお店継ぐつもりだったのね。

良成 ええ？ 知らなかった。

莉菜 そりゃ誰にも言っていないもん。でも、さすがにそれは無理だなんて……だけど、なんかお店に帰って来ちゃうんだよね。

良成 おやつあるからね。

莉菜 まあ、それもそうなんだけど、ここにいるの好きなんだよね、なんか……ハ、ハ、ハクシヨン！

良成 寒いかな？
莉菜 うん、ちよっと……。
良成 ちよっと待ってて……。

良成、事務室の方へ。

6—②

残る莉菜。

ふと、ビデオに気づき、近づく。
ディスプレイをのぞき込んだ時、血相を変えて上手から飛び
込んでくるパジャマ姿の凜子。

凜子 莉菜！ お父さんは！
莉菜 あ、そっち。

事務室の方を指さす。勢いよく下手へ向かう凜子。

莉菜 あ、そっちじゃない！
凜子すでに下手へ。

莉菜 お母さん！ お母さん！ そっちじゃないってば！ こっち、こ
っちだから！
凜子（声・同時に）お父さん！ お父さん！

莉菜、下手へ。

莉菜 お母さん！ だからそっちじゃないって言ってるのに……。
莉菜が下手に去りかけた時、事務室から毛布のような物を持
って良成戻ってくる。

良成 莉菜、ほら、これかぶっとけ……。
莉菜 あ、うん……。
凜子（声）お父さん！ お父さん！

凜子戻ってくる。良成を見つけると。

凜子 お父さん……。

良成 ああ、はい……。

その場にへたり込む凜子。

凜子 はああー、良かった……。
莉菜 ハ、ハ、ハクシヨン！
良成 風邪、ひくから、ほら、こっち……。
凜子 ……お願いだから、一人でどこかに行かないで……。
良成 ……うん……わかった……。
凜子 いなくならないでよ……。

凜子、緊張が緩み、ガタガタ震え出す。

良成 お母さんもこっち、こっちにおいで……。

莉菜、凜子、ソファの方へ。二人まとめて肩に毛布を掛ける良成。
と、凜子、莉菜が良成の腕を引っ張り、二人の真ん中に入る。三人で毛布にくるまるの図。
そしてソファに座る。

莉菜 なんか、懐かしい匂いする……。
凜子 お父さんの匂いだね……。
莉菜 加齢臭……。
良成 そうかあ？
莉菜 あったかい……。
凜子 そうね、あったかいね……。
良成 連が見たら、ずるいって言うかな……。
凜子 6年生にもなってまだ布団に潜り込んでこようとするからね。
莉菜 ……ねえお父さん。
良成 ん？
莉菜 あたしに、写真、教えて……。

ゆつくりと明かりが落ち始める。

良成 え？ ああ……。
莉菜 ね。
良成 うん……。
莉菜 お母さん。
凜子 なに？

莉菜 あ、やっぱいいや……。あ。
凜子 なに？ 気になるじゃない。
莉菜 お父さんには話したから……。
凜子 え？ なに？ それは、お母さんには話せないってこと？
莉菜 そうじゃないけど、お父さんから聞いて……。
凜子 なによお、父と娘で秘密作って……。
良成 いやいや、俺から言ってもいいか？
莉菜 いいよ。
良成 ……まあ、今はやめとくか……。
凜子 ええーっ。

ゆつくりと暗転。

7 さらに一年後の秋①

明るくなると、十文字が、一人壁に飾られた写真を見ている。
よく見るとその写真は、寛志の遺影である。

十文字 遺影か……。

山崎、下手から登場。

山崎 お気に入りですね。

十文字 そうですか？

山崎 良く見えますよ、岩渕先生の遺影。

十文字 そうなのかなあ……。

山崎 もうすぐ一周忌だからなあ。

十文字 もうそんななりますか？ あっという間ですね。

山崎 十文字さん、昼休憩終了でオツケーですか？

十文字 ああ、いいですよ。

山崎 助かった、外で飯食ってきます。

十文字 行ってらっしゃい。

山崎 ここんとか水曜日には必ず来られちゃうんで……。

十文字 ああ、保険屋さんね。

山崎 いくら練習だとは言われても、毎週来られちゃうとちょっとねえ。とかやってる間に来ちゃうから、行ってきます。

山崎、下手へ去る。

すぐに後ずさりして戻ってくる山崎。

その後から入ってきたのは、棗と楓。

棗 いつもありがとうございます。いくらお昼休みとはいえ付き合っ
てもらっちゃって……。

山崎 ダメです！ 今日という今日はダメです。
棗 ええーっ……。

棗、泣く。

山崎 も、もう騙されませんよ！

楓 ダメだって。

棗 泣き技はかなりのお人好し相手でも3回が限度って事ですね。

楓 まあ、練習だから。

山崎 それに、今日は弁当ないんで外で食べてこないと……。

棗 軽食でも持ってくればいってことですか？

楓 いやいや、それはやり過ぎです。

棗 そうですよ。

楓 でも山崎さん、結構詳しくなったでしょ、保険。

山崎 そりゃまあ、毎週説明されてますからね。

楓 ホントにありがとうございます。契約とかそういうの関係無くて

もなかなか聞いてくれる人いませんから……。

山崎 だって岩渕先生の奥さんの練習に付き合っただけで頼まれ

ちゃったんで……。

十文字 ぼくじゃ練習相手にならないもんねえ。

楓 でも本当は十文字さんみたいな人にこそ必要な保険ってのもある

んですよ。

十文字 っていうけどさあ、プロから見て、リタイアした人に本当に勧

められる保険ってある？

楓 ……貯金ですかね。

十文字 山崎くん、保険入るならこういう人から入った方がいいよ。

山崎 なんですか？

楓 不良保険外交員なんで……。

十文字 まあ、そのうちわかるから。

山崎 はあ……。

棗 そういうことで今日もよろしくお願いします。

山崎 さよーならー。

棗 ええーっ。

山崎、下手に逃げ去る。

棗 逃げた。

楓 逃げましたね。

十文字 店にぼくだけ置いていなくなっただけいいんだらうか……。

棗 十文字さんもすっかりお店の人ですね。

十文字 ああ、なんかね、人手は欲しかったみたいなんで。

楓 ボランティアですか？

十文字 いやいや、バイト、アルバイトですよ。

棗 楽しいですか？

十文字 楽しいですね、この歳になってバイトしてるのがなんか楽し

いんですね。どうですか？ 保険屋さん？

棗 覚えることがいっぱいでもう大変です。

楓 それで良く代理店引き継ぐ気になったわね？

棗 やっぱり収入の途絶える危機感？ あとは小山さんとの出会いですかね。

楓 まあ、あたしも渡りに船だったんだけど、のらりくらりと不良保険外交員やっていると、まあ当たりがきついよね。利幅の低い商品ばっか売ってるから。

十文字 あれ？ 岩瀬さんが小山さんの弟子みたいなもんですよね？

棗 まあ、そうですね。

楓 でも、あたしの上司は岩瀬さんなんです。

十文字 どういうこと？

棗 うちの旦那のやっていた代理店業務をあたしが引きついで、小山さんをヘッドハントしたってことです。

楓 でも、保険業界はあたしのが長いんで、いろいろ教えてるわけです。十文字 なんか複雑だなあ。

楓 至ってシンプルですよ、保険売ってるだけなんで。

7—③

上手から凜子登場。

凜子 山崎くん、お昼休憩入っていいよって、あれ？

棗 あ、どうもこんにちは。

楓 お世話になってます。

凜子 あ、どうも、山崎くんは……。

十文字 外にお昼食べに行っちゃいました。

凜子 あれ？ 保険営業の練習台は？

棗 逃げられました。

凜子 逃げたかあ……あ、十文字さん、お昼休憩、いいですよ。

十文字 あ、ぼくはもう休憩終了なんで。

凜子 了解了解。

楓 あの、入りそうだったら入れちゃってもいいですか？ 山崎さん。

凜子 え？ ああ、それはまあ、山崎くんの判断で。

楓 今練習させてもらってる学資保険は、その、子ども産まれたばかりのご家族にはかなりいい商品なんですネ。

凜子 子煩悩だからねえ、毎月こどもの誕生日っていうと、早く帰っちゃうからね。毎月だよ、毎月。今日は月誕生日なんで、とか良くわかんない理屈をこねて。

十文字 月誕生日！ あ、ぼく今日月誕生日だ。

凜子 それは……。

三人 おめでとうございます。

十文字 ありがとうございます。

楓 月命日は聞いた事ありますが、月誕生日ってのは聞いたことないですねえ。

凜子 そういえば、もうすぐですね、岩渕くんの一周忌。

凜子 そうですねえ……。

全員、寛志の遺影を見る。

十文字 ……ぼくも、遺影撮ってみようかなあ……。

三人、十文字を見る。

楓 ……いいと思います。十文字さんならかなりかっこいい写真撮れるんじゃないですか？

凜子 そうねえ、こことかじゃなく、店の表に飾れるようなねえ……。

十文字 いやいや、そんな表舞台は勘弁してくださいよ。

凜子 いいんじゃないですか、表舞台。

凜子 ああ、でも、カメラマンがいらない！

7-④

莉菜が大きな荷物を抱え、下手から帰ってくる。

莉菜 ただいまあー。

凜子 なんだ莉菜かあ……。

莉菜 なんだって、すみませんでしたあたしで……。

凜子 山崎くんだったら良かったんだけどなあ。

莉菜 どうせあたしは未熟者ですよ。

棗 あたしも未熟者です。
楓 あたしだってまだまだ。
莉菜 あ、いらつしやいませ。
楓 すっかりお仕事姿が板に付きましたね。
莉菜 いやいや、まだまだ修行始めたばかりですから。
十文字 あの……莉菜ちゃんにお願いしてみてもいいですかね？
莉菜 え？ なにをですか？
十文字 ぼくの遺影をね……。
凜子 いやいや、まだまだちゃんと撮れないですから。
莉菜 あたしも、ちよつと自信ないです。
十文字 いやいや、それがいいような気がするんです。
凜子 なんてまた？
十文字 初めてだと、なんか良いんじゃないかと思うんですよ。
棗 ビギナーズラック！
十文字 ですよね、これから何千人、何万人撮るかわからないけど、
最初の一人ですからね。
莉菜 はあ……。
十文字 お願いできませんか？
莉菜 え？ 今ですか？
楓 こういふのは勢いが大事ですからね。
凜子 大丈夫かなあ。
十文字 大丈夫大丈夫、気楽に撮ってみてくださいよ。
凜子 どうする？ 莉菜……。
莉菜 ホントにあたしでいいんですか？
十文字 いいのいいの。
凜子 あの場合、撮影料は頂きませんので、実費だけで。
十文字 ラッキー。
棗 なんか、面白そうですね。
十文字 お願いします……。
莉菜 ……やらせていただきます……。
凜子 んじゃ、セッティング……。
十文字 大丈夫です。ぼくも手伝いますんで。
棗 あたし、見学してもいいですか？
楓 どうぞどうぞ……。
莉菜 よろしくお願いします。

莉菜、上手へ去る。追って、十文字、棗も去る。
残る凜子と楓。

楓 頼もしいですね。

凜子 まだまだ危なっかしくて……。

楓 子どもの成長は早いですよ、うちなんか、こないだ入隊したばかりだと思ってたのに、もう……。

凜子 そうですね……。

楓 いまは、無事に帰ってくることを祈るだけです。

凜子 また、行ってるんですか？

楓 今度は西アフリカです。

凜子 遠いですね……。

楓 必死で守ってきたつもりが、いつのまにか生贄になってるみたいで……。

凜子 大丈夫、大丈夫ですよ、きつと……。

楓 もう、祈るしか出来ません……。

凜子 祈るしか出来ませんか……。

楓 ええ、もう何もしてあげられません……。

凜子 ……今度帰って来たら、冷麺食べに行きましょう。骨付きカルビもつけて。

楓 ええ、はい。

上手から莉菜登場。

莉菜 お母さんちよつと……。

凜子 何？

莉菜 影が……。

凜子 影が何？

莉菜 いいからちよつと来て……。

凜子 だって……（楓を見る）。

楓 ああ、あたしも撮影、見せてください。

莉菜 ええーっ。

楓 迷惑ですか？

凜子 いえいえそんなことは……。

莉菜 ええーっ。

凜子 なに？ 何が問題なの？

莉菜 だから影が変な風に出ちゃうんだって……。

凜子 どれどれ……。

三人、上手へ去る。

エピローグ①

舞台は次第に夕方から夜へ。

上手からビデオをつけた三脚を持って良成登場。

真ん中あたりにセッティングすると、上手の椅子を持って来て、ビデオの向いている方に置く。

録画スイッチを入れ、椅子に座る。

良成 あー、テス、テス、こんにちは、坂下良成です。

そこまで言うと、ビデオのところに戻ってくる。そして、撮れているかの確認をする。

良成 オッケーだね。

良成、再び録画スイッチを入れると椅子に戻る。

良成 えー、みんな、元気か？ お父さんは、ご覧の通り、大分元気になってる。……でも、もしかして、みんながこれを見る頃は……やっぱダメだ！

ビデオに駆け寄ると、一時停止し、下を向いて落ち着くのを待っている。

上手から、ちょっと急ぎ足で凜子と莉菜登場。

良成とビデオを見ると、凜子は口に人差し指を当て、そおーっと後ずさりする。

良成、落ち着くと、再び録画スイッチを入れて、椅子に戻る。

良成 ……本題から入る。お母さん、あ、いや凜子さん、ありがとう。莉菜、ありがとう。連、ありがとう。お父さんは幸せ者だ。お母さん、一番苦しい時期に店を任せるようになってしまったって本当に……めんなさい。

凜子、莉菜、様子を窺いながら、そおーっと、良成の後ろに回り込みビデオに映ろうとする。

良成 莉菜、写真の腕は上達したか？ ……こだけの話だが、実は結構上達していると思うぞ。面と向かって褒めるのは恥ずかしいのでここで褒めておきます。連、まだ一年生だからもちろんレギュラーにはなれないだろうけど、ちゃんと素振りはしとけよ。見えないところでの努力がいずれ花開くんだからな。

凜子、莉菜、体の後ろに隠し持っていたものを出す。

と、それはDVDのディスクのようだ。

二人で両手に2枚ずつ。どうやら合計8枚はあるらしい。

良成 写真館の商売は、これからも決して楽じゃないと思う。でも、写真撮りに来てくれる人がいる限り、続けられればいいなと思ってる。多分ここに来る人は、ただ写真が欲しいんじゃないかと、何か違うものが欲しいんじゃないかな。それは人それぞれで、思い出であり、ここで一緒に過ごすわずかな時間であったり、あとはその、特別な感じたいなものとか、だから、ここはいつでも、いつまでも特別な場所じゃなきゃいけないような気がする。まあ、そんなことを言っても、実際どうすればいいかなんて良くわかんないんだけどね。もし莉菜や連が思いつく新しいことがあったら、それを話してくれ。そしてそれを実現するのは、多分お父さんじゃなくて、莉菜とか、連とか、あ、もしどうしてもいやになっちゃったり、上手くいかなくなっちゃったり、借金増やすとかしないので、潔く閉めていいからね。

良成の後ろでは、凜子と莉菜が、ディスクを振ったり、良成の頭に指で角を生やしたりして遊んでいる。

良成の言葉が続く中、ゆっくりと明かりが落ちていく。

— 了 —

